

戦士

No. 4

社会主義学生同盟
理論機関誌

- 主張 (1)
- 国際情勢 武田五郎 (6)
- 国内情勢 竹野 巖 (21)
- 現代革命史
「ドイツ革命の敗北とローザ」 八木沢二郎 (31)
- ニュース
春斗をめぐる情勢 労働問題研究会 (52)
- 書 評
「マルクス主義に於ける革命とジャコバン主義」
—ドイッチャー「武装せる予言者」—
松村三郎 (55)
- 編集後記 (56)

1964. 3.

社会主義学生同盟
関西地方委員会発行

張 主

☆ 日韓会谈阻止斗争を戦い抜け！

☆ 四月下旬、全国学生統一ストを準備せよ！

☆ 全大学に社学同を組織し、学生運動を根底から再建せよ！



(1) 現在、日韓政治会谈は再開され、日韓会谈の妥結への機運は

急速に拡がり、池田首相は、オリンピックを前にして、大巾会期延長しても、国会批准を行う」と言明するにいたつた。

このような、日韓会谈の急速な進展は、従来のそれとちがつた様相を呈している。少なくとも、安保改定以前に於ける日韓会谈は主要に、米のヘゲモニーのもとに反共体制の一環として、日、韓が共同の共産主義に対して「和解」するといった内容を有していた。

だが、いまや、日韓会谈は、すでに安保改定によつて表現された、日米新時代よりも、もう一步先へ進んだ日本帝国主義の野望のもとに展開されつつある。

それは、何よりも最近の世界帝国主義再編の一層の深化と密接している所に特徴を有している。即ち、五十八年のEECの成立にメルクマールをおく帝国主義再編の新しい局面は、フランスに於けるゴリスムの確立に象徴される、国際独占体の結合と対立の深化に見合つた、深刻な階級斗争を先づ切抜けなければならなかつた。ベルギーに於けるゼネスト、イタリアでの反ファシヨ斗争、そして日本での安保斗争がそれらの主要なも

のであつた。そして、かかる帝国主義の新しい局面は、モスクワ宣言から八一ヶ国宣言にみられた公認の国際共産主義運動の矛盾を明るみに出し中・ソ論争の公然化にまで発展させた。そして、かかる両体制の、それぞれの再編は、今や、仏の中共承認を生み出すまでに進展するにいたつた。このような、仏帝国主義の中共承認を平和共存への動きとして歓迎することは、まったくバガげた事であろう。まさに、仏帝国主義が中共承認を一個の戦術として東南アジアに進出し、更にヴェトナム中立化の提案に現われたような旧仏領の失地回復にのりだした事、帝国主義間の再分割が新しい局面に入つた事をこそ評価しなければならぬ。まさに、かかる再分割の新局面——特に、その東南アジアに於ける進展と関連してこそ日韓会谈は把握されねばならないのだ。

日韓会谈は、確かに、一部の諸君が云うように、韓国に於ける、低賃金を利用する事による経済的利益という面も、あるいは日共のいう、軍事体制との関連という面も有している。だが、そのような方向に日帝をつき動かしている市場分割への要求、日帝主義にとつて戦後初めて他民族抑圧であり、本格的な活外

進出であること、そのみならず、一層激化するであろう再分割に有利な地歩で韓国に於いてきつこうとするその意図を見落してはならないであろう。かかる日本帝國主義の動向は、やがて、アメリカとの関係の再調整をもたらし、七〇年安保改定に表現されるであろう条約の実質を形成してゆくであろう。

(2) だが、しかし、我々は、かかる意味で、当面の最も重要な斗争課題として日韓会談阻止斗争を組織する中であつて、権力スケジュールからして、その重要性を説くのみでは、きわめて不十分であろう。他方に於いて、それが斗かわれる主体の側の諸条件を明確にし、その発展の契機を見出す事がないならば、日韓斗争の過程、就中その終了の過程で方向を見失う事は必定である。例えば、東京社学同の一部の諸君には、そのような傾向が明白に見て取ることが出来る。かかる主体的条件を明確にしないならば、斗争の敗北のたびに、帝國主義論のあやまりを自己批判し、別の帝國主義論という旧ブンド革通以来の悪循環を断ち切り、理論を実践によつて検討しつつ展開させるといふ事は不可能であり、ますます一にぎりの集団と化してゆく事は見えすいた事である。

我々は、前号に於いて、第三の転換の開始と、その若干の内容について指摘しておいた。そして、学生運動の内部にも新しい波が形成されつつあることを確認してきた。だが、かかる新しい波は、八一中委一九大会の過程での全学連再建のように、正統的になされる事は不可能であるように見える。確かに、学生運動の本格的な再建のためには、大衆の一定程度の自然発生的な盛り上がりが必要ではあるが、それは、同時に、

故に、自己保身のために、身を寄せるにすぎなくなつていゝ。もちろん、トロツキストは絶対に排除される。こうして、市民共闘が、労働者階級のヘゲモニーで止揚されるのではなく、党派の利害によつて、その分捕り合いが展開されているのである。こうして、春斗―日韓と経る中で、社共の、党派の性格をおし出したところの斗争が前面化するであろう。このことが、学生運動にもたらすものについていえば、まず第一に、学生運動の孤立感の増大であり、第二に、先進的労働者との直接的な交流が途絶するということであろう。

安保ブンド全学連指導者が、「学生運動の徹底化―労働運動の左翼化」という、シエーマを確信し、現実にも一定の有効性をもちえたのは、共斗組織内部で、活動的な労働者と交流し、オルグすることが可能であつたこと、戦術において独自性を保持しながらも、共同行動の場で、学生運動そのものが、直接、他階層に影響しようということにあつた。第一の点についていえば、学生運動は、ほとんど、丸裸で斗わねばならない（新左翼労働運動が、いまだ微弱な段階で）ことを意味している。したがつて、全国政治斗争を保証するためには、強力な政治指導が要求されるのである。後に述べるように、諸潮流の指導性が喪失していること（あるいは、日韓斗争の過程で、放置すれば破滅することの必至なこと）を考へるならば、今や、他方に於いて、日韓阻止全国学生共闘会議の設置によつて統一戦線を強化すると共に、全国大学に社学同を組織することによつて、根底から、学生運動の再建にとりかからねばならないことを我々は決意せざるを得ない。

それを指導している諸党派を媒介にしてのみなされる。従つて、ここでは、前号の主張を前提として、諸潮流が、新しい流動状況にいかに対応しつつあるかを検討しなければならぬ。学生運動における諸潮流の問題を論じる前に、簡単に、最近の既成左翼の動向と、それによつてひきおこれつつある政治斗争の變化について考へておきたい。それは、学生運動の展開にも大きな困難と、任務を課しているからである。今春斗で、ますます明らかになつてゐる如く、社会党II総評のセクト主義は、資本に對する大衆の激しい不満を、国家的第三者機関による右翼的集約に解消するための官僚統制に比例して増大している。一方

安保斗争の成果を喰いつぶすことによつて、基幹部門に對する一定の党勢拡大に成功した日共は、労働過程への資本の支配（これこそ、とりわけ、安保後三年の資本家政府の中心政策であつたにもかかわらず）に對する斗争をネグレクトし、民々綱領に基く反米基地斗争を對置してきたのであつたが、今春斗においては、三・一ピキニデーの静岡集會によつて、實質的に、三・二―三、春斗統一行動をポイコットしたのである。そして、日共のこの傾向は、昨年の第九回原水禁大会に典型される如き更に、労働組合に於ける階級的・民主的組合の提唱に現われているように、大衆組織の外郭団体化によつて、促進されている。安保斗争において市民的政治斗争に對應していた市民共闘組織（ここでは、市民社会のあらゆる構成分子が同資格で方針決定に参加する）が、崩壊し、残存しているものといへば、共闘といつても、名ばかりの、実体は日共の外郭団体集団であり、社会党系が入る場合も多くの場合、平和運動における弱体の

第二の点、すなわち、党派化された運動の上層にうごめく輩でなく、職場で、苦闘する社共の下部黨員をいかに、我々の下へ結集するかという問題は、労働戦線における政治組織を媒介として考へねばならないことを要求する。昨年夏以降、このよる活動は関西において集中的に強化され、今や、関西ブンドを中心に結成された全国共産主義者協議会とともに、関東地方にも、組織が結成され、新左翼労働者の結集がすすめられている。

本号の情勢分析の項にのべられているように、既成諸政党の再編が、進行している現在、このような任務は、きわめて重大なものになりつつある。

さて、かかる困難な条件の下で、当面の最も重要な斗争課題たる日韓斗争を闘いぬくべき学生戦線の条件はいかなるものであろうか。

運動の、新しい波の性格と、「第三の転換」の内容については、「戦士、No. 2、3合併号主張」や、本号の情勢分析の項に述べてあるので省略するが、ここでは、諸潮流が、この「第三の転換」にいかに対応しつつあるか（たとえ無自覚にしろ）明らかになりたい。とりわけ、春の日韓斗争を保証するために、単に主体的努力を強調するというのではなく、現実存在し運動している諸党派の積極的な、発展的な傾向をとりだし、それをより拡大する事を通じて、自らの成長をもちかたつていく道をとることが、必要だからである。

大管法斗争以来、久しい間、労働運動の後退と、政治情勢の固着の中で、諸党派は、ほぼ完全に方向を見失い、政治指導力

を喪失してきたといつてよい。東京社学同にとっては、大学斗争の戦術を媒介とした党派性の喪失（それは、日韓とポラ帯をめぐる方針の混乱 etc. によつて倍加された）↓無指導としてあらわれた。マル同が「革命的反戦斗争」なるものに「活路」をもとめたのも、このような状況の反映であつた。そして、構約、社青同を、全体として、ぼう大な戦線離脱申と、活動家の無党派化を生み出したのであつた。

しかし、昨春秋、東京において、日韓反対の統一行動が成立し、久々の大衆動員を行へたこと、地方大学、私大の学園斗争の大規模化、シ烈化といった現象などが、新たな運動の波の訪れを、感知せしめたのであつて、その上日韓情勢の切迫という要素が加わると、さまざまな思惑をこめて、ともかくも諸潮流は、流動化を開始したのであつた。それは、労働運動における年末斗争の一定の流動化に触発されることも大きかつた。我々の現在の課題は、この、活動性を増した諸党派のエネルギーを、如何に有効に、日韓斗争へ向けて組織するかということである。もちろん、我々は、このような作業のみでは、全国学生運動の再建にとつて、決定的に不十分であることを知つていゝる。そればかりか、来るべき反動に耐えうる全国学生運動は、単に、弱さの均衡としての、もたれあい、的なものでなく、強固な組織のヘゲモニーによる学生運動の根底からの再建を要求するものであることを知らねばならない。しかし、我々は、ドグマとして、自己を固定するのではなく、諸組織との相互関係の中で、常に自らを止揚してゆくべきものとして位置づけていゝる。

「反帝及スタ戦略、革マル主義」からの離脱を意味するものであつた。（このことは、「戦士」No. 2・3 合併号・檜原論文にくわしい）、彼等が、大衆運動への関心を示めせば示すほど、逆いがたい力で、彼等は、情勢分析を始めることを強制され、「反帝反スタ」の無内容を自らバクロセざるを得なくなつていゝる。全学連再建の提起は、日韓斗争の高揚が直線的に全学連再建に結びつくかの如き安易な情勢判断と、左翼組織の基礎工事を抜きにした、どうしようもない方針であることは明らかである。

我々は、一方において、全自代を始めとする全国統一戦線組織をつみあげていくと同時に、新左翼の組織強化、拡大を精力的に準備しなければならぬと考へ、すでに、関西一円の支部の活動を緊密に結合する体制をとると共に、東Ceteの主要大学との間の連絡を密接にする措置をとつた。このような、我々の活動は、関西バンドによる関東方面の新左翼労働者の結集作業ともタイアップしつつ、すすめられている。このような過程で、我々は、自身の問題意識をより総合的な、より包括的なものに高めてゆかねばならない。

以上

さて、諸党派の対応の中で、まず、我々はドグマをもつて自己の支柱とし、ますます、自己を、少化してゆこうとしているところの残念な傾向を、東京社学同の諸君の一部に、みとめざるを得ない。それは、あれこれの、大学教授の手になる経済の受け売りにすぎないにもかかわらず、綱領としての帝国主義論が得られたとし、その理論を体現するものこそ、日韓斗争だから、直ちに前衛党を組織しようといふばかりである。そして、それを認めない部分に対しては、自らを分離するという形をとつていゝる。それは、まず、第一に自己の認識をとじることを必然化するものであり、広大な階級斗争の要請する諸問題に、応え得べくもないであらう。

第二に、主体の諸条件の検討に基かず、諮意的に、「日韓革命斗争」というシエーマを叫ぶのみでは、日韓斗争そのものにも対応できないであらう。いづれにしても、学生労働者のいづれの部分をも結集しえず、ますます狭少なおしやべり集団に転落してゆかざるを得ないであらう。バンドを名のりたいなら諸君がまずなすべきことは、バンドと革命の総括——それも「帝国主義論」のつくろいに専念するのではなく、バンド及び以降の新左翼運動を（特殊な運動としてはなく）、その普遍性において総括することから始めねばならないであらう。

現在の新左翼運動は、その飛躍にあたり、まさに、その回答を要求してゐるのではないだろうか。

次に、左翼における一定の流動化の中で、一応、前進的な要素としてマル同中核の動向に注意しよう。六二年のマル同分裂六三年夏の反戦集会への参加 etc. の一連の過程は、まさに、



(I) 視点と特徴

① 第二次帝国主義戦争後、アメリカ帝国主義は、全世界にドル不足をひきおこしつつ、ドル金体制をうちたて、アメリカ帝国主義のグローバル・ポリシー（世界政策）が国際政治の特徴となった。

② 資本主義固有の法則としての発展の不均等は、英・独・仏・伊・日等諸帝国主義の生産力の復興・発展、アメリカ帝国主義の権造的停滞状況をもたらした、五八年に始まるドル危機は国際独占体の基底において資本主義世界の再分割が強力に進められていることの実現である。

各国の金・外国為替保有高

	世界	アメリカ	イギリス	西独	仏	EEC	日本
1954(末)	551	230	30	26	13		7
1963(9月)	682	168	32	74	48	197	21

(EECはジュネーブを含まない5ヶ国の計) 世界経済白書63

③ 現代における国際独占体の分割の特徴は(i)ヨーロッパの没落、(ii)旧植民地体制の崩壊、(iii)生産技術の発達等の要因により、レ

欧州諸国では、巨額の費用を投じて原子力の知識を獲得したが、現在アメリカがその知識を自国だけでなく、他国の産業にも自由により活用しているのに対して、欧州ではそのごく一部分を適用するにとどまっている。……欧州のどんな国も、原子力時代を約束する技術革新の出発点となるべき研究や基礎投資に多くの努力を払う段階に達していない。それどころか、この新しいエネルギー資源と、それを利用する新技術によつてもたらされる生産力の発展は、欧州の個々の市場のあまりにもせまい壁にぶつかることになり、原子力革命は数年たたないうちに、旧式な欧州の経済構造を破壊するようになるだろう。

⑤ 一九一七年以後の世界において、数度のプロレタリア世界革命の敗北の結果として、現代世界帝国主義はますます寄生性が増大し、腐朽化が進行しつつある。この寄生性の極端な増大の結果として、アメリカ、ヨーロッパ労働運動の右傾化、社会排外主義・社会帝国主義の支配の状況が生まれた。この事実の「いわゆる先進帝国主義諸国における「プロレタリア」→「サラリーマン」への変化」は労働者階級の地位の変化として、構造改革論者に対して一つの理論的な拠り所を与えている。例えば仏のフォセールはレーニンを次のように批判している。

「こうした進化のきざしを認めたエンゲルスとレーニンは、それを労働貴族の理論で説明した。彼らは、この表現によつて、高給をうける労働者の種類（それには労働組合と社会民主主義の官僚達が含まれる）と、国家装置や、サービスや、商業その他によつて、工業から転向させられた、賃金生活者、との合成体をさし示した。この異質的な社会層は、帝国主義的超過利潤

レーニンによつて指摘された「帝国主義によつて特徴的なものは農業地方の併合だけではなく、まさに工業地方をも含めた併合への熱望（ベルギーに対するドイツの欲望、ロートソングンに対する仏の欲望）である」の傾向が、主要なものとして、即ちヨーロッパを主戦場として展開されていることである。

④ 欧州経済流通運動は、アメリカとイギリスに対する、ヨーロッパ独占体の自己の分割領域を防衛するための、ヨーロッパ独占体にとつて、利益があるかぎりつづけられる、一時的な協定（合従連衡政策である、そしてアメリカ・EEC、イギリス・EEC、EEC内部（例えば独・仏間）において対立・矛盾が形成されつつある。欧州経済統合に関して、EECの骨組となつたローマ条約の原型であるスパーク報告は次のようにのべている。

「経済発展の可能性に直面して、欧州の各市場の障壁がどんな影響をおよぼしているかについては、次の三つの具体的な例を考えるとよい。第一は、欧州では、経済的にもつとも強力なアメリカ式機械を使用できる巨大な自動車工業がひとつもないことである。第二に、欧州大陸の一国として、外国への輸出を考慮しないで、大型の輸送機をつくることはできない。第三に、

のおこぼれにあずかるが故に、プロレタリアから区別された。事実においては、この分析はもはや検証にたえることができない、どいのは、それは資本主義が、資本主義制度の建設期をひとたび過ぎると、プロレタリアの生活水準の一定の上昇を確保する可能性をもつことを無視しており、またそれは、資本主義の経済成長が進行するにつれて、社会的分業がますます数多くの、第三の活動を生みだし、その全てが寄生的とはとうていいえないことを無視している。最後に、それは労働者運動の若干の分派と若干の幹部の腐敗という実際の現象を過大評価している。」（資本主義の将来）

事実においては、果してフォセールは全世界的分析を進めているか、否、仏一国の分析だけである。韓国における、ラテン・アメリカにおける労働者階級アメリカの黒人労働者の矛盾の分析、又それらの国における「資本主義の建設期」がどのようになすんでいるのか、先進帝国主義諸国における一国のある局面（急速な発達過程）の分析―現象から理論を形成することは一般的に修正主義者―日和見主義者に特徴的な方法である。問題は国際独占体の基底―生産過程においてどのように矛盾（解決の道のない）が形成されているかということであり、労働運動の極端な右傾化は主要な原因として何よりも、帝国主義の寄生性の極端な増大の結果として把握されねばならない。

「だが、この腐朽化の傾向が資本主義の急速な発達を排除すると考えることは、誤りであろう。」（レーニン）

⑥ しかし、国際独占体による再分割競争の激化は、労働者階級の経済斗争において、「成長鈍化」「安定成長」「生産性上昇

にみあう賃金上昇」「コスト・インフレ」のブルジョア宣伝とともに、世界的に賃金大叩き斗争は終えんとしつつある。さらに全般的にみられる現象としてのインフレと失業は六二年のヨーロッパ労働運動の高揚を起点として、ヨーロッパ運動、アメリカ黒人運動の政治過程への登場、「社会主義」への分裂が始まりつつある。

⑦ 危機の進行とともに、日和見主義―構造改革論者、市民主義者―が超帝国主義者、社会排外主義者に転化する過程が進行し始めるだろう。既にその過程は始まっている。構造改革派の中でカウツキーの再評価が流行している。資本経済分析の一八において。

「カウツキーのこの予想(超帝国主義論)は、……とうてい、今日の我々を承服せしめるものではないが、たゞ、資本主義世界の危機が帝国主義の存在形態に質的変化をもたらさしうるとしたことは、まさに卓見だといわねばならない。」「経済統合運動は、正当にも、帝国主義的市場再分割斗争の国家独占資本主義的形態(?)であるといわれるにいたっている」

資本主義の体制的危機がどのような質的変化をもたらしたと、今日のか、帝国主義の存在形態に質的変化をもたらさしうるといふかぎり、それは資本主義の生産過程において矛盾が形成されないといふことを立証しなければならぬ。」「帝国主義資本主義の上にたつ上部構造である。」「(レーニン) 一体、国際独占体の基底において、一九一〇年代と本質的に違う変化があらわれているのわ、否―依然として生産の集積と独占の形成はより急速に進められ、国際独占体の必死の分割斗争は不断に続け

られ、解決の道のない矛盾がいよいよ増大している。あるいは、次のようにも述べられている。
「パリ―ボン枢軸のヨーロッパに対する脅威を防がねばならない」

「た行の経済統合過程の性格と趨勢を實質的に修正し、独占資本家からそれをとりあげ、共同体諸国のもっている権力主義的な性質を除くために、EECを構成している諸条約の改正をめぐらしてイタリア政府にイニシアをとらせること」
(構造改革二二：イタリア共産党)

伊共産党に対する幻想は、五八年以降の情勢に対する対応を徹底的にバクロすることによって粉砕されねばならない。

⑧ 先進国プロレタリアートの完敗は、第二次大戦后全体として現代世界革命の波動は先進帝国主義諸国から后進国へ移行した。朝鮮において東南アジア(特に旧インドシナ)において、アフリカにおいて、ラテン・アメリカにおいて、民族解放斗争は前進した。アメリカ帝国主義の反共軍事体制は、何よりも、これら后進国の民族運動を暴力的に粉砕しよう大なるアメリカ帝国主義の利潤を保障する暴力装置として生れ、維持された。

⑨ 国際独占体の新たな市場再分割は全体として、再び現代世界革命の波動を后進国から先進帝国主義国へと移行させつつあるが、現在においても民族問題の重要性は変わらない。

⑩ 現代において民族問題は、正に国際独占体の再分割を軸に、把握されねばならない。「アメリカ帝国主義は依然として全世界人民の最も凶悪な敵である。……全世界人民の当面の任務は、アメリカ帝国主義の侵略政策と戦争に反対する広範な統一戦線

をうちたてることであり……。」(承祥 世界政治資料一七〇、一七一)といった情勢分析は世界人民の綱領とはなりえない。問題は国際独占体の、各国帝国主義の分割(強盗の分け前をめぐる争い)に対する各国人民の自国政府打倒、民族解放の闘いでなければならぬ。このような一面的な情勢分析と、それとむすびついた万年恐慌論は世界プロレタリアートにとつて何ら具体的な大戦術を提起しえない。

II 不均等発展と国際独占体による
資本主義世界の分割

⑪ 第二次大戦后、ヨーロッパ資本主義は、マーシャル援助を足がかりとして、五三年を境に戦后復興過程を終了し、技術の発達に伴う急速な生産力拡充の下で、急速に生産の集積、資本の集中を達成した。企業の集中・合併運動は、まず、二・三流企業の整理統合、その巨大企業への吸収・合併から始まった。この過程を最も急速におし進めたのは「高利貸帝国主義」からの脱却をめざしたフランス帝国主義である。そしてこの過程の進行は、いわば国際独占体が、単なる協定の段階から、生産過程において結合される段階に到達しようとしている。市場の分割と再分割の過程の中で、共同企業の設定、龐大な先進工業国への資本輸出等の事例は、事態が、単なる国際カルテルから、カルテル、トラスト、コンツェルン、シンジケートを内包するところの国際独占体コンビナートの形成、垂直集積への傾向が生きていることを示している。このことは、産業資本主義、帝国主義初期の段階においてはみられなかつたほど、資本主義

の世界的な結合が進んでいること、その結合が単に交換過程の結合から正に生産そのものへの結合に深まりつつあることを示している。このことは、正に現代世界革命のカギとして国際独占体が登場しつつあること、ヨーロッパを主戦場として続けられている死闘は、戦后景気循環の最終局面に近づくとともに、ヨーロッパプロレタリアートの「社会主義」への分裂を意味する。さらにヨーロッパにおける過剰生産の成熟は新たな、はげしい、后進国の再分割をもたらしている。

工業生産物における各国の比重

	米	英	独	仏	EEC	日
1938	36.3%	13.8%	11.1%	5.7%		3.6%
1953	51.5%	10.4%	7.2%	3.8%		2.1%
1959	44.8%	9.8%	9.2%	4.4%	20.3%	3.8%

△ 経評 62'6

輸出高 (1億ドル)

	米	英	独	仏	EEC	日
1956	19.1	9.2	7.4	4.5		2.5
1962	21.6	11.1	13.3	7.4	34.3	4.9

(EECはルクセンブルグを含まない五ヶ国の計)
経済白書63'

各国内企業の集中・合併

	仏	オランダ	西独	ベルギー ルクセンブルグ	伊
56~61'7	262	79	76	67	16件

△ 自由化とEEC 野村昭夫

自動車生産における集積の進行

西独	V W	六社計
一九五七	四四・四%	八一・九%
一九六一	四六・一%	九二・三%

鉄鋼生産における集積の進行

仏	ルノー	シトロエン	シムカ	四社計
一九五七	二六・二%	一三・六%	一五・八%	六八・〇%
一六一	三四・〇%	二四・四%	一九・六%	九六・八%
西独	合同製鋼	クルツナ	七社	
一九三八	三八・七%	一〇・五%	七六%	
	テュツセン	クルツナ	八社	
一九六〇	一一・七%	一一・四%	六八・三%	

西独の場合、戦后占領政策によつて企業分散化合同製鋼の解体が進められた。

仏	ユジノール	四社	伊	フィンシデル
一九六〇	一六・五%	五七・七%	一九六〇	五三・三%

△ 経評六三年一一、現代帝国主義講座第二巻二六三頁

⑬ 資本家達の独占的団体、即ちカルテル、シンジケート、トラストは当該国の生産を多かれ少なかれ、完全にその手におさめることによつてまず第一に、国内市場を相互のあいだに分割する。資本主義国は、即ち久しい以前に、世界市場をつくりだした。そして、資本輸出が増加し、最大の独占的諸団体の一切

の対外的および対植民地的つながりと「勢力範囲」とが拡大するにつれて、事態は「おのずから」これら独占体のあいだの世界的な協定にとつて、国際カルテルの形成にとつて、適するようになった。」(レーニン：帝国主義論)

現在においては事態は、資本投下の領域に、単なる販売統制のためのカルテルから、さまざまな生産部門と生産段階における国際的独占体コンビナートの形成へ、資本の垂直的集約への傾向へ発展している。我々はそのような例をEECを中心にみることができる。

(i) 在外支社、子会社の設置

五八	六二	三	四	二	七	〇	一	五	五	一	四	二	二	二	二	三	三
仏	西独	伊	オランダ	ベルギー	ルクセンブルグ	計											

(ii) 共同企業の設立

① 仏のサワラ石油開発にもなつて仏—英、仏—独、仏—国際石油カルテルの対立が激化した。マルセイユからスマトラスプールをへてカールマシューに至る石油のパイプの建設にあたる南欧パイプライン会社の設立には、シエル、カルテックス、ブリテイッシュ・P、フランス石油、ドイツ独占体等一九の独占体に参加した。

② この傾向は電子、原子力、石油化学等の新興産業に著しく、電子工業では④オランダのフィリップスを中心とするオランダ—仏の五社によるプロエレクトロンの創設。⑤シエナラル無線(仏)とフィンメカニカ(伊)とによる特殊電子管生

産の為のIREMの創設。⑥仏のテレグラフ・サンフィス所は

オランダのワールヴェルケと合併で「欧州真空管」を設立。

⑦ さらに西独のレジスタ・ファブリと「欧州抵抗器」を設立。

⑧ 仏のトムスンハウストン、独のラレフォンケン、オランダの

フィリップ、伊のフィンメカニカによる、NATELの創設等がある。

④ その他

① フィマツト(伊)とシムカ(仏)がモロッコによるSOM ACOの設立。② バイエル(独)と仏のクレイベコロンブスとによる、エラストメールシンテーゼの設立。③ オランダのAKVグループとアメリカのグットリッチとの提携による合成ゴム工場の設立等がある。

最近の技術発達は、工業的に発達した国々の資本移動をもたらし、これらの独占体のからまりあいをつよめている。国際独占体の結合的さまさまの形態において表われている。

(iii) 技術の交換、施設の共同利用

① 仏のルノーと伊のアルファ・Rとの協定は生産の専門化を定めている。② ベルギーのワベナ、エアフランス、ルフトハンザ、伊のマリタリマによるサービスの共同利用を協定したエアユニオンの創設等。

生産技術の急速な発達の下で、国際特許権カルテルは重要な地位をきづいた。

「西独のIGファルベン工業グループの一つ—バイエルとアメリカの化学トラスターデュポン、モンサント、エニラインとのあいだに結ばれた一九五四年の協定においては、(その対象

はケオシマン酸と(エーテル及びアルコールの、高分子化生産物とをもちにした新しいプラスチック生産の特許であった)、バイエルとモンカントはアメリカにモバイ創設し、さらにブラジルに化学工場をたてた」(Industrial & Engineering Chemistry 1956)

以上の事例は、技術と生産の発展の下で、正に国際独占体の分割の死斗がつけつけられていること、しかもその発展として、資本の集中や融合が国民的領域をこえて、国際的コンビナート—垂直的集積への傾向の過程が、国際独占体のさまさまの民族的部隊と民族的部隊との斗争、民族的部隊のブロックと民族的部隊のブロックとの斗争、民族的部隊内部の斗争の中で進められている。

⑭ 現在、国際独占体の形成にあつて資本輸出の役割は極めて増大している。レーニンは資本輸出を三つに分類した。

「国外に投下された資本は、種々の日々のあいだにどのような分配されているか? この資本はどこに投下されているか? この問題に対しては、たゞ概括的な答えしかあたえることができない。それにしても、その答えは現代帝国主義の若干の一般的な相互関係と関連とをあらわかにすることができようである。……イギリスではその植民地領土が第一位にのぼっているが、この植民地領土は、アジアその他についてはいかにおよばず、アメリカでも(たとえば、カナダ)、はなはだ大きい。

……仏では、事情は異なる。この国では在外資本は主としてヨーロッパに、なかななくロシアに(一〇〇億フランをくだらない額が)投下されている。しかもその大部分は貸付資本、即ち国債であつて、産業企業に投下される資本ではない。イギリ

スの植民地的帝国主義と區別して、仏の帝国主義は高利貸帝国主義とよぶことができる。ドイツには、第三の種類がある。ドイツの植民地は大きくなく、ドイツの国外投下資本は、ヨーロッパとアメリカとのあいだにきわめて均等に分配されている。〔帝国主義論〕

現在において資本そのものの運動は本資—利潤資本は変わらない。投下領域によつてこの傾向に區別される。第一は、先進帝国主義諸国家への、第二は、后進国への資本投下である。そして、現在において第一の資本の運動は極めて重要である。

⑮ 戦後の西ヨーロッパへのアメリカ資本の運動は大別して①マシヤルプランの時代、②五〇年の朝鮮侵略戦争を境に軍事援助増加の始代、③五五年を境に、特にEEC結成后急増した民間資本が中心をしめるに到つた段階にわけられる。

アメリカの資本投下 (1)

	五三〜五七		五八〜六一	
	純輸出	投資総額	純輸出	投資総額
EEC	三六九	八三七	一三一一	五八〇
仏	五二	一九九	三二八	一七四
西独	一六二	三二七	五八六	二九四
イギリス	四九八	一〇七六	一七三三	六〇七
西ヨーロッパ	九九八	一九九九	三二七二	一四六一
全世界	六六一八	一一五五七	七四〇三	五五四四
				一一七五一

(一〇〇万ドル)

アメリカの海外資本現在高

	世界	西欧	EEC	カナダ	中南米	その他
五二末高	一四七	三三	〇八	四六	五三	二六
五七末高	二五四	四二	一七	八八	七四	五〇
六二末高	三七二	八八	三七	一三二	八五	七七
五八、六二	一三三	三二	〇八	一八	三三	五〇
本国送金						

△ 経評六三・一一(一〇億ドル)

イギリスの資本輸出についてはロンドンタイムズが次のように報じている。

「太平洋を渡る資本の流れは、本質的に双方からのものである。……アメリカ商務省の極めて、綿密な評価によれば、一九五七年末のアメリカでのイギリスの直接投資は、一九四一年の七億ドルに対して、一九億ドルを下らなかつた。この増大ぶりは十分注目し得る。しかしさらに注目すべきことは、イギリスでのアメリカの直接投資も又一九億ドルと評価されていることである。」この比較が公表されたのは、アメリカの直接投資が最近イギリスで特に激しい批判を浴びていることと関連してであつた」

△ フメリニツカや国際的独占体の現代の発展に関する問題によつて

西独の外国株式投資額

△ 共同市場の進展と資本交流・

アジア経済研究所

	58	59
オランダ	50	254
スイス	21	107
アメリカ	13	85
仏	4	138
その他	60	254
計	148	876

(100万マルク)

アメリカの資本輸出の特徴は、(イ)正に世界的であること、その中では特にヨーロッパへの投資の増加が著しいこと。しかも、最近の特徴はアメリカ本国における、資本の過剰から、ヨーロッパ、特にEECへの企業進出によるものであつた。このことは(イ)EECにおける経済成長を促進し、発展の不均等を一層強めた。(ロ)EECにおけるヨーロッパ独占体、民族部隊とアメリカ資本との対立を激化した。(ハ)第三国市場、本国市場への輸出において、アメリカ資本の内部矛盾・対立が激化しつつある。この傾向は今後強まるであろう。特に(ロ)は、現在、過剰設備、過剰生産の発生、段階に突入しつつある。最も危機感ある仏ブルジョアジーを先頭としてますます矛盾が激化しつつある。(ハ)のアメリカ資本の進出に対する規制措置設置への動き)そしてアメリカの工業製品の輸出の減退、特にEECにおけるそれはますます強まっている。

イギリス、仏は旧植民地国の比重が高いこと。しかし、すう勢としてその比重はへりつつあること、英のEECの加盟追求。仏の高利貸帝国主義脱却をめざしての企業集中、合理化へ進行

EECへの企業進出にみられ、西独との間に矛盾を形成している。

独では、EEC、ヨーロッパを中心に資本輸出が進められ、石炭—鉄鋼独占を中心として、EECにおける最強の地位をきざしている。しかし、その地位をめぐって独仏間の対立ははげしい。

⑯ 金融資本の国際的結合は部分的段階から、全面的な段階に到達する戦後のこの展開は、ヨーロッパにおいて、国際投資・テスタの結成を中心に進んでいる。

①「アフリカ企業へのヨーロッパ資本の共同投資は可能かどうか、を追求するコンスアフィクの設定—南独銀行、インドシナ銀行、ロンドンハンブツス銀行、パリエデベイバ銀行、その五ヶ国の大銀行。(ロ)ドイツ銀行とパリエデベイバ銀行—ヨーロッパ工業開返会社、この会社は独・仏両国の工業企業を設立すること等を目的とする。

(ハ)仏のパリ合同銀行、クレデイ、リヨネ、ソシエテマゼネラル、アルサス銀行、ドレフニス銀行と西独のドレスデン銀行を代表とするグループとの間に「共同市場内での緊密な協力の為の双務協定」さらに仏の他銀行と西独、伊、ベルギー、オランダの諸銀行との同様の協定。

(ニ)西独のベルンナルンデルスゲゼルシャフト始め、EEC各国が西独二三%、仏二二%、オランダ一〇%、ベルギーと伊が各一四%の比率で投資トラストコンニオンを設立した。国際投資トラストは、オイロパアイン、トンドウストリア、インラルヴィスタ(以上西独中心)、ユニオン、アメリカ、

西欧共同のユーリット、オイロパファアール、ユーロアマン
ト、ニユーヨーロピアン等多数設立されている。

⑰ 一九五八〜一九六二年后進諸国で実行されようとしていた「
后進国間の政治統合」は、帝国主義諸国家による再分割をめぐ
る斗いの中で、さらに国際収支悪化とインフレ、食糧危機によ
る新たな帝国主義支配へのプロレタリアート人民の反撃によ
つて分解しつつある。

アメリカ帝国主義の支配するラテンアメリカへの独・伊・英
の進出、英・仏等ヨーロッパ旧宗主国支配のアフリカへの独・
米・日の進出、仏は独とブロックを形成して、アフリカ支配の
ヘゲモニーをとろうとしている。(ユーラフリカ計画)。イギ
リス・アメリカ支配の東南アジアへの西独・日・仏の進出、全
般的にみて戦后圧倒的な優位をきざいたアメリカの一元的支配
体制が崩壊し、正に帝国主義諸国のわけ前をめぐる斗いに対す
る被抑圧民族・プロレタリアートの民族解放・自国政府打倒の
斗いが斗われねばならない。

帝国主義国の対アフリカ輸出額

	米	EEC	仏	西独	英
一九五六	六	二四	一三	四	(四二)
一九五九	五	二四	一一	五	(三八)

(億ドル) (英は対スターリング地域全域)

⑱ 現代帝国主義の運動

⑱ アメリカ帝国主義の大西洋共同体構想の挫折、チキン戦争、
GATTにおける関税一括引下げをめぐる米・EECの対立は、
EECのブロック化傾向をより一層強めた。現在アメリカは減
税法案による大巾な企業減税と消費景気の上昇による企業合理
化にかけている。(法人所得税五二%↓四八%、純減税一一
億ドル)。

ラテンアメリカ、東南アジア、アフリカにおける戦線の後退
は軍事援助削減をもたらしている。

「世界政治と世界経済の中における米の地位の低下が、現在
のアメリカの世界政策の上に充分反映していないということ、
つまり資本主義政治経済の中におけるアメリカの地位、又社会
主義体制を含めての世界政治の中における地位が、かつてよい
はいちじるしく低下しているにもかかわらず、アメリカの現実
の世界政策と軍事政策が、ひきつづき十年前と同じ政策をとつ
ていることから生ずる諸矛盾が、現在、つぎつぎに顕在化しつ
つあるわけである」(現代のアメリカ―陸井三郎)

戦后アメリカ帝国主義の支配体制をうちたて、后進国からの
龐大な利潤を保障した軍事体制は、現在もその体制によつて龐
大な海外資本が守られているが、同時に十年前の帝国主義諸国
間の力関係の上のうちたてられたこの軍事体制はアメリカに重
荷となつているのである。NATO、NEATOにおける軍事
体制の肩代りとは、アメリカと仏、独、或いは日本帝国主義が
対立する矛盾の中で実現する。「強盗の分け前」の変化の結果

東南諸国の輸入依存率

	米	英	独	仏	オランダ	EEC	日本
ビルマ	4%	19%				12%	24%
タイ	17%	10%	6%			17%	28%
インド	22%	20%	12%				
パキスタン	24%	18%				20%	
セイロン	7%	25%					
インドシナ	21%			20%			
内ベトナム	26%			18%			22%
インドネシア	16%				4%	14%	17%
フィリピン	39%		4%				19%
台湾	36%						40%
韓国	59%	50%	6%				11%
	62						25%

59年度, and 59~61年度平均

を意味する。六三年のクレイ報告によると、

「要点だけを摘記するならば、第一に、アフリカ諸国につ
て、その旧支配国であり欧州諸国―主としてイギリスと仏―に
まかせて、アメリカは援助政策では、あまり手をださない方が
いい、コンゴについても、アメリカの責任と義務はあまりに重
すぎぬ、というアフリカ全体を援助の対象としては格下げする
ことを要求している。第二に、アジアについては、インドとパ
キスタンに関するかぎりは、(中国封じ込め政策)との関連で
とくに力を入れる必要があるが、「東南アジア諸国、台湾、フィリ
ピン、韓国は、本報告を拍手しないであろう」といういい方が
されるほど戦線を整理する意味で、思いきつて援助対象から外
せ、といっている。第三に、ソ連周辺諸国に過去の援助の七二
%が投ぜられたが、ポラリス潜水艦があり、ICBMの貯蔵が
いちじるしく増大した今日、周辺諸国に対する援助の意味は根
本的に低められていることを考慮すべきだ、としている。第四
に、近くの国々||中南米諸国に最重点があるという結論を下し
ている。」(同じ)

⑲ アメリカ、イギリスに対する共同防衛協定たるEECは、内
部において、石炭―鉄鋼―機械コンツェルンの伝統に依存した
ドイツとサワラの石油、天然ガス、アフリカに対する支配の優
位をバックに急速に成長をとげている仏とのあいだにヘゲモニ
ー争いが激化している。

製造品輸出に占める各国の割合

	米	西独	イギリス	仏	伊	日
一九五〇	二七%	七%	二六%	一〇%	四%	三%
一九六一	二〇%	二〇%	一六%	一〇%	六%	七%

△ 自由化とEEC……野村哲夫 一五二頁

独はプラント輸出を基軸に全世界的に進出し、旧仏領、コンゴに対するユーラシア計画をめぐる独仏の対立―分け前をめぐる争いは激化している。西独の進出は、

(イ)カメルーンへ四〇〇万マルク(一〇〇万ドル)の長期借入金(五九)

(ロ)トーゴのロメ湾建設に対して、一七億六千万フランの建設契約(六〇)

(ハ)ジーゼルヴェルク社はダホメに資材供給に関する長期契約を結んでいる。等

「サワラ石油の開発をめぐって、開発会社の株式五一%以上を仏が持つという仏政府の決定に不満な西独は、これ又独自で開発を計画しようとして、仏との間にいざこざをおこしている。仏実業界の「ラヴィフランセーブ」、「マルシユニコミーン」などをみると、アフリカ開発をめぐる両国のあいだのいざこざの記事がうんざりするほどのついでに。そして仏の実業界は、アフリカへの西独の進出に対する不安や恐れをかくそうとしていない。これは緊密をほころ「独仏枢軸」の知られざる半面である。」

②① 全てのバルカン諸国の同盟に全力をあげて抵抗するであろう。両者の共同の利益は、この地域を植民地地域としていつそう容易に搾取することができるように、これらの民族とトルコがたがいに対抗し、対抗することであり、これらもそうであろう(レーニン……帝国主義論ノート)

②② 中仏国交回復は、現在仏の東南ア進出政策として、ユーラシア支配の偽装として遂行された。特に旧インドシナにおける仏の支配力低下に対するまきかえしは、始まっている。我々はこのこと自体支持する。日中国交回復についても同様である。しかしこのことは仏、日本帝国主義がどのような意図をもってそれを遂行するかを暴露し、仏帝国主義、日本帝国主義、社会排外主義に対する闘いを停止するものではないし、現在の日本の階級斗争の重要な斗争課題ではない。

極東の一角に保護貿易制度の下で、強固な国内体制をきざいだ、日本帝国主義は、IMF八条国移行、ガット一二条国移行、OECD加盟と国際的な市場競争の中へ登場しつつある。

后進国輸入におけるシェア

	東南ア	中近東	アフリカ	中南米
EEC	一二%	二四%	三五%	二〇%
アメリカ	二三%	一九%	一三%	三九%
イギリス	一一%	一四%	一七%	六%
日本	一六%	四%	四%	四%
総額	九二%	四七%	七六%	八一%

△ 経評, 64.1 (億ドル)

(自由化とEEC……野村昭夫)
西独の対アフリカ輸出増加率

	アフリカ非連合	アフリカ連合	アジア
一九五〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九六〇	九二九	四九七	一〇三六

(英系) (仏系) (英米系)

②③ イギリスは慢性的傍滞の状況からの脱出をこころみて、スターリング地域をきりすててもEEC加盟を遂行しようとした。だが、

「我々がEEC加盟によつて得ようとしているものは、新しい市場に即した産業の型と規模をつくることであつた。その必要は、我々がEECに入ると否にかかわらず引続き存在するものである。」(The Economist 63.2)

このことは、一方国内における全面的な企業合理化をつづけると同時に、なおも、関税引下げ交渉に努力を注ぎつつ、EECへの進出を志向している。キプロス問題は、イギリスのトルコギリシャ人民の対立を利用した支配政策にある。即ち少数民族トルコを利用したキプロス支配方式の破たんの矛盾である。このことはさらに最近、ギリシア―仏間に結ばれた援助協定とからまつて複雑にからまりあいを見せている。現在の時点において問題の解決はトルコ・ギリシア両国プロレタリアート農民の帝国主義に対する共同の闘いしかない。しかし事態は、再びあのバルカンの悲劇がくりかえされようとしている。「ヨーロッパの帝国主義もツアーリズムも、いうまでもなく、

日本の輸出地域

	北米	ヨーロッパ	アジア	その他
一九五三	二四	九	五一	一六
一九六一	三一	一四	三七	一九

△ 自由化とEEC……二一六頁

粗鋼	米	独	日	英	仏	伊
五七	一〇二	二五	一三	二二	一四	八
六一	八九	三六	二八	二二	一八	九

(百万トン)

従属的帝国主義ではなく、

「たゞ日米同盟が、日本にとつてうま味をもつのは、アメリカから経済的利益をひきだせることであつた。」

「アメリカはアジアにおける日本の影響力の拡大が、アメリカの利益にならないことを、早くから、敏感に感じている。」

「今日でも、一たん悪化しかけた日米両国の関係は、底流からいうと旧に復することなく、悪化へと進んでいくとみるよりほかないのではないか。」(エコノミスト六四・二・四 蠟山芳郎)

②④ 現代帝国主義の運動は、新たな、激戦的な市場再分割の時代に突入しつつある。米―仏、米―西独、米―日、英―日、仏―独、英―仏、英―EECと複雑な対立関係が構成されようとしている。現在の局面では、米―EECの対立を中心に進んでいきだが、今後突入しようとしている世界分割は世に混とんとしている。ヨーロッパにおける米英―仏独、仏―独、仏―伊の対立

ラテンアメリカにおける米—英（アルゼンチン、英—独—対立、アフリカにおける英—独、仏—独の対立、中近東における米—独の対立、アジアにおける米—仏、米—日、米—独、英—日の対立。

②③ 現段階における矛盾の蓄積の進度をしるには、現在の階級斗争の局面がどのような現代資本主義の構造を形成するかという側面を明らかにしなければならない。

(IV) プロレタリアート被抑圧民族の闘い

②④ 先進諸国家における矛盾の現象は、インフレの進行と失業等の増大への傾向として現われている。このことは各国帝国主義の対外競争力強化におけるの合理化の進行につれて、賃金抑圧の傾向とともにますます顕在化しつつある。大巾賃上げ斗争へ時代から、即ち経済斗争の自然発生的に、国家の経済斗争への介入をバネとして政治斗争に転化する過程への進行が六二年ヨロツパ労働運動、アメリカ黒人運動を起点として始まりつつある。今后ますます激化する后進国再分割競争の中では和足主義—超帝国主義、社会排外主義への闘いの重要性が増大するであらう。

生計費指数

一九五五	日本	九七	仏	八三	独	九四	伊	九三	英	八九	米	九三
五八	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
六〇	一一五	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇
六二	一二二	一一九	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇
六三・六	一二八	一二五	一二二	一二二	一二二	一二二	一二二	一二二	一二二	一二二	一二二	一二二

△世界経済白書 63

白に不可能である。現状でも、四八〇万の失業者の中約二〇〇万は一四歳—一九歳までの十代労働者であるといわれている。アメリカ労働省の公式統計によっても、一六才—二一才迄の黒人青年の千人に一人は失業しているといわれている。ワーツ労働長官が、失業問題—なかんづく黒人青年の失業問題—アメリカ史上の最も爆発的な社会問題—および「一九六五年ごろには重大な危機がおとずれよう」と警告しているのも、当然といわなければならない（現代のアメリカ）

②⑤ この原因には、具体的には、(イ)農業危機による失業、(ロ)最近のオートメ化に対して、黒人青年は教育にめぐまれていないため、非常に不利、(ハ)独占体による黒人—白人の対立の利用—労働組合にはいない場合が多い。(ニ)黒人の低賃金労働の維持に独占体は関心をもっている—そのことによる白人賃金の意義づけ、超過利潤、この黒人運動は、アメリカ資本主義の矛盾の激化とともに、アメリカプロレタリアートの闘いの中核を構成するであらう。

②⑥ 仏の炭鉱労働者、独・伊の金属労働者を中心とする闘いは、自然発生的な斗争に対する権力の介入を招きつつ、一定の賃上げをもつて終った。仏のスト規制法、ベルギーの強烈な弾圧立法—①政府のスト中止権、②ピケ隊の投獄、③合流ストの禁止—等があこなわれた。六四年度のヨーロッパ労働運動の闘いは注目する必要がある。その性格はどのようなものとして闘われるのか。

②⑦ 被抑圧民族の闘いは、全般的な第一次農産物価格の低下—帝国主義諸国家による搾取の強化の下で、新たな市場再分割を前

失業者数 (万人)

一九五五	日本	米	英	独	仏	伊
五八	六八	二九〇	二三	九三	一六	一九一
六二	四〇	四〇〇	四六	六八	一〇	一七六
	四〇	四〇〇	四六	一四	一三	七一

Monthly Bulletin of Statistics.

②⑧ 六三年八月のワシントンデモを契機にブルジョア的に集約されるかにみえたアメリカ黒人運動は、依然として根底から矛盾をかかえ、

「これまでのようにたんに合法的なデモをやっているだけではだめだという段階に入り、この冬にはダウン・クリスマス—クリスマス打倒運動が起つたし、また（刑務所をいつばいにしる）運動までおこっている」（現代のアメリカ）

段階迄に至つた。この運動のかかえている根底からの矛盾とは、アメリカ資本主義の深刻な構造的な腐朽化、矛盾が、集中的に黒人におしつけられていること、黒人と白人は半分以上も給料が違い、その対立を利用して労働者階級の分裂をはかっている。失業率は白人のそれにくらべれば倍近く高い。このような政策を進めているのは南部の右翼ではなく、南部に大工場をもつデューポン・GE・WGHなどの大独占である。この深刻な失業問題は、

「現在のアメリカ経済の著しい成長鈍化、すでに存在している四八〇万の失業者を解消しえないという現状からみても、これほどの新しい雇用をつくりだすことは、きわめて明

つづけられている。

②⑨ ベトナムの革命情勢は進展している。ベトナム—ベトナム農民の部隊は前進している。後進国革命の典型として解放区—人民の武装—アメリカ帝国主義との闘いとして、斗われている。ベトナム支配のヘゲモニーをめぐる米—仏の争いは、内部クーデター—迄発展した。

朝鮮始め、各后進国において、人口増加、インフレ、失業が全般的に進化している。

②⑩ イギリスの支配体制強化としての、マレーシア構想に対して反対運動がおこっている。アメリカはマレーシアが英国の取得権を固めることになるので冷淡な態度をとっている。后進国の経済統合は、国際独占体の搾取に対してのみ共同防衛という性格をもつ場合のみに正しい。しかし具体的にどのような性格を達成するかは断固革命的な方針以外ありえないだろう。アフリカにおけるこの種のこころみに注目すべきである。このような同盟が、帝国主義の共同支配に対して、被抑圧民族の弾固たる闘いとして展開されるべきである。

②⑪ 中ソ論争は、国際プロレタリア運動の敗北の結果としての現在の労働者国家の困難の表現である。(イ)論争への介入は、(ロ)世界資本主義の現在の転機、国際プロレタリアート運動の現在の局面を把握すること、(ロ)即ち、ドル—金体制の崩壊に伴う、帝国主義諸国家による世界の分割、ヨーロッパを主戦場として展開されている。周辺革命—先進国革命への波動の移行。このことは、世界革命の危機同時性、連続性を意味する。(后進国革命の重要性を無視することではない)、(ハ)ソ連論、スターリ

ニズム論から出発すべきではない。それは国際共産主義運動との関連でとらえ、(イ) (ロ)の過程で外時条件として位置づける。

(二)日本の革命運動の戦略、戦術と密接に関連して提起すること、でなければならぬ。(iii)中共の見解(イ)アメリカ帝国主義に対する闘い。(ロ)このことは部分的な民族において、戦術になりえども、アメリカ、ヨーロッパ、日本のプロレタリアートにとっては戦術としても適しないし、国際独占体による資本主義世界分割の現段階において、方法的にまちがっている。(iii)ソ連共産党の見解(イ)平和共存—完全軍縮、(ロ)世界資本主義の分析において、中共のように観念的、スタリンのではないが、超帝国主義論への瀬戸際にたつている。(iv)先進国革命における構造改革思想・弾固とした二重権力の思想がない、(v)我々の見解(イ)ヨーロッパプロレタリアートの闘いは、NATO反対、ECC反対、ヨーロッパ労働運動の統一指導部と自国政府打倒の闘い、(ロ)ブルジョア民族主義(ネール、スカルノ等)に対する共産主義者の非妥協的斗争による粉碎—中国革命における日共合作の夫段の総括、(vi)后進国の帝国主義の政策としての自家統合(ユーラフリカ、進歩の爲の同盟、マレーシア等)して反対、民族自決権をかちとる闘い、帝国主義の分割に対する共同の闘い、(ii)インドシナ、ベトナム、キューバ等の革命に対しては毛沢東理論(革命戦術)は有効性をもつ、フルシチョフの後進国革命に対する政策は全く犯罪的である。現在、特に一九一七以後のヨーロッパ労働運動の闘いの総括が必要である。(ドイツ革命、二六年英国、イタリア、仏、スペイン人民戦線)

(V) 結 語

世界資本主義の分割競走は、明らかに、戦后新たに段階に突入した。我々は現在の局面における矛盾の進歩を分析し、弾固として、帝国主義打倒、自国政府打倒の闘いを追求しなければならぬ。矛盾の進化と共に日和見主義者の超帝国主義者、社会排外主義者への移行が始まるであろう。安保斗争における市民主義の役割はこのような事態に対して象徴的である。このような思想に対する闘いを、個々の階級斗争の中で準備していかなければならない。

階級情勢の特徴とヘゲモニーについて

竹 野 巖

総評の危機が叫ばれ、政党による労働運動の分裂の時代の全面化が始まろうとしている。

市民的政治斗争の変質が云々され、階級斗争の転換期が進行している。一体、その実体は、どの様なものなのか。我々をも含めて転換させている階級的動向とは、何なのか。労働運動の転換、階級斗争の転換、及び諸ヘゲモニーの動向と性格、我々自身が主体的に切り開いていくべき局面について述べたものです。

I

五七年の国鉄、五八年の王子製紙、五九年の富士鋼管、六〇年の三池と資本家階級との闘いに於て、血をもつてあがなわれた日本労働者階級の運動は六〇年以降—現在、転換点に立たされている。それは、五八年を分岐点とする資本主義世界の「協調から競争」—「安定から激動」への転換である、自由化々の波動が日本資本主義の構造転換(開放体制への移行)を必然化させた事に規定されている。

資本蓄積の現局面の形態は、日本資本主義の曲り角(明治維新—オ二次大戦後—現在)ともいわれる要因をなす、企業合同合併コンビナート、系列化と労働過程に於ける激しい搾取(単なる近代化—技術革新オートメ、だけでなく、労働密度の強化による高搾取)によつて剰余価値を表現している。

資本家階級の労働政策は、総同盟、全労の育成、労働組合の分裂から総評の丸抱え、労資協調政策へと展開している。具体的には、合理化(首切り、時間管理)を技術革新との関連で遂行し、その過程で配置転換、近代的労務管理体制の導入、労働力構成の変化に対する職務給導入等により職制支配を強化し労働過程を直接資本が掌握する事により、職場に於ける労働組合を骨抜き(組合だけの組合幹部)にし、これによる労働者の直接掌握を企業防衛イデオロギーの透過と結合させる事によつて労使協調体制を布くというものである。そして、首切りを、臨時工、社外工、下請工の整理、希望退職、新規採用停止として展開した。又、他方民間からはみ出る、職場活動家に対して、格下げ、処分、配置転換、又、国家の治安政策によつて孤立化させ、パージしていくという弾圧案を遂行している。

日本労働運動は、五五年來の大転換点に立たされている。合理化は、全産業に波及している。特に、オ二次大戦後急進に発展しつつあった。鉄鋼機械、自動車、石油化学に進行している。過剰生産が、日本独特の形態で大量の人員整理を押し進めている。すなわち、臨時工の雇用契約更新の中止(これらの部門は、特に臨時工を大中に利用して来た)下請部門、社外工へのしわ寄せ等がそれである。

五〇年代の日本資本主義の高成長が、労働者階級内部のこの分

裂(大企業の本工と臨時工、社外工、中小零細企業の労働者)を利用して遂行しえた。すなわち、「大企業本工労働者が、階級的に成熟される事なしに経済要求の充足にあずかりえたのは、(あるいは、経済要求の充足それ自体としては、)らの階級的成熟をもたらしえなかつたのは)中小企業、臨時工、社外工等の労働者群から高搾取しうる機械(四九年の大約化以降、顕在化した日本の二重構造)の下で可能であつた。」この労働者階級内部の上層と下層との分離を利用してはじめて高成長が可能だつたのだ。

底辺労働者は、大企業本工労働者と全く異つた生活論理を持つまでに分断され、全く失うべき何も持たない存在であるにもかかわらず、経済斗争からも陳外されて来た。下層は、その無運動の故に、上層の運動を抑制し、その事により自らを差別した。上層と下層が互いに抑制しあう悪循環であつた。

以上の五六年度の労働運動の特徴は、日本資本主義の転換によつて大きく変えられ様としている。

要求提出イストライキー生産管理ゼネスト(？ゼネスト)という日本革命の法則の一端が、共産党の解放軍規定にさる支配権力への屈服によつて開花しない事により戦后革命は流産し、四九年の大敗北として逆に「開花」して以降、日本労働者階級は、上層と下層の分離という日本資本主義の独特性―二重構造に規定された弱点を支配階級に最大限利用しつくされる事により、現在の局面を迎えている。その過程は、同時に、公労協、鉄鋼、国鉄日教組、労労等日本労働運動を支えていた部隊の血みどろの闘いと挫折でもあつた。

いわば労働者階級は、安保斗争(五〇年代)の市民的政治斗争の開

裏返し、創価学会化)し、上層は時間管理、オートメ化、首切り等の合理化と職務給導入等の賃金抑制の攻撃により、五〇年代の労働者としての基盤を失い、失うべき何も持たない部分へとおいやられるであろう。

労働者階級の分裂は、上層が下層の上と立脚して民同支配にあまんじるといふ局面(下層が無運動という事の反映としての資本許容的物取り主義)から、下層自身のアナキー化と、上層自身が「もの取り」を出来ない(賃金抑制、時間管理)事により総評民同の危機(資本との協調から従属へという全労路線への傾斜を否定すれば分解するといわれている)におち入つていたのである、労働者階級の分裂が五〇年代と異つて新たにどの様に、形成されるかという問題は、ロシア革命以降の挫折した革命(一九一八ドイッ、一九二〇イタリア、一九三〇ドイッ、一九三六フランス・スペイン……)の教訓としても決定的に重要である。(注、この事については、本号「ドイッ革命とローザ」八木沢論文参証)安保―三池以降、かかる問題意識をも持ちながら登場した政転斗争は、現実には、資本の生産点に於ける攻撃に対し、それと直接対決する職場斗争と敵対し、労働プラン作製という幹部斗争となり、賃金斗争に於いても、自ら国家の介入を要請し、幹部交渉妥協に終つている。合理化の保護、援助、等国家政策とタイアップし、個別組合を中央集権化し、幹部支配を強化すると同時に、職制との結合した時点で破算が宣言された。(もちろんこれは彼ら社会党主流の勢力の破算を意味しない、彼らは今最后一層、資本に妥協することにより自己保身をするであろう)

又、資本との対決を徹底的に放棄した、民同路線―基地斗争に

花)―三池斗争(日鋼室蘭、尼鋼、国鉄新潟、富士鋼管等の社共をのり越えた徹底的抵抗斗争の五〇年度最後の開花)の挫折と敗北によつて、一大転換期の過渡期(五〇年―五四年の時期が、五年以降六〇年までの運動への過渡期であつたという意味で)に立つている。

我々は、来るべき労働運動の形態と展望について、今だ、決定的方向性を明らかにしえない。それは、支配階級の攻撃の性格―迂回作戦―にも規定されている。

労働者階級の分裂(上層と下層)をいかに統一するか。新しい局面から形成される「革命的な芽」はどの様にして成熟して来ているのか。もちろん、それらの点は、主体的な「実験」によつて、現在の過渡期に確得するという姿勢をも含めての事であるのだが、ともあれ、日本資本主義の転換(構造的再編成)は五〇年代の運動がもたねばならなかつた(民同支配という下では)上層と下層の悪循環―「下層は、その無運動により上層の運動を抑制し、そうする事により、自らを差別せしめて来た―」を、異つた形で提起している。

すなわち、「大企業本工労働者が階級的に成熟する事なくして経済要求の充足にあずかり得たのは、中小企業、臨時工、社外工等下層労働者から強力で搾取しうる機械(二重構造)の下で可能であつた。」五〇年代、の労働運動の悪循環は、鉄鋼、機械、自動車、石油化学に進行している過剰生産による高搾取と無運動により、又、大巾賃上げにより、上層が、存在しえた基盤自体を否定するであろう。

いいかえれば、下層は、アナキーにハンプロ化(あるいは、

よつても、労働者階級の分裂の止揚は夢物語りである。

II

日本資本主義の構造的再編成にもなる、労働運動の転換を以て上の様な基本点で接近しようとしているのだが、次に我々は、現在、進行している、今春の闘いの中から、過渡期の現局面に、どの様な諸要因が形成されつつあるのか見て行こう。

資本家階級の攻撃の性格は、一、今迄の様に戦斗の分子の失脚等をはかつて直接組合を弱めようとした段階から、組合幹部をだき込み、組合をプロ化、貴族化した幹部の集団にして、職場への影響力をたち切る。二、近代的労務管理の徹底化。すなわち、最近大企業では、人事部門が、人事部と勤労部の二つに分けられ、人事部には、更に専門の課がつけられている。又、「ライン・アシンド・スタッフ」システムが急速に採用されつつあり、職場は、このシステムの末端である作業長(フォーマン・カナルビー・あるいは、ビッグンスター)にがっちり握られており、抱き込み政策といまつて幹部の活動領域は、組合室だけという事態が起つている。三、単なる技術革新でなく、E・E(メンダストリアル・エンジニアリング)(労働科学)を用いて労働密度の強化による、徹底した搾取(労働強化)を遂行している。四、職務給導入により、若年労働者の賃金上昇という労働構成の変化に対応して、賃金抑制を行つている。

かかる具体的政策をうち出しつつ、「協力よりは妥協」という民同左派よりは、むしろ「協力一本」の全労、総同盟―民社党育成を中心課題としている。

総評と組合幹部のハツスルは、何よりも、日本労働運動の転換を資本へのストレートな攻撃の方向で見出しえず、資本の強裂な攻撃に対して、組合を守る（自己保身）ことさえ出来ないという危機の表現である。反官部斗争を大田、岩井が、自ら職場の労働者におおりに立て、指導する事によつて、組合立て直しをはからねばならない次点まで、民同左派は追い込まれている。資本の攻撃と民同左派の対応をくわしく見て見よう。

電機労連では、短時短による時間管理―労働強化政策を中心に資本は攻撃をかけ、一方職務給を導入している。組合指導部は、生産性向上と労働強化を意味する短時短を支時し、職務給とも斗つていない。かかる資本の攻撃と組合幹部の協力による労働強化―高搾取により、やり場のない気持を、資本家は、新しい労働管理―ピクシスター（労働者の相談役、組合活動の範囲まで掌握）により、組合を通り抜けて労働者の一人一人を資本が掌握しようとしている。

鉄鋼労連は、鋼管の作業長制度、富士鉄の新勤務体制と配置を中心として攻撃をかけてきている。才一次合理化の時期にはI・IIの導入や管理局の設置、作業の標準化、才二次合理化以降、ライン・アンド・スタッフ組織による作業長制度―出勤、欠勤の許可権、採点等大巾な権限が与えられている。労働組合の形骸化を進める一方、従業員教育福祉厚生拡充、新生活運動、若い青年労働者対策に全力を上げている。

造船では、企業合同により、産業別組織形骸化の動きが顕在化している。その中で、同盟会議、全国民連、民同左派、左派の抗争が全体として、同盟会議、全国民連のヘゲモニーで固定化されつつある。全世界的な自由化の進展と国際競争戦の激化は、日本に於ても下層労働者のアナキー化（及びその裏目としての創価学会化、ファシズムの一種の萌芽ともいえる）をますますたらしださる。逆に上層が五〇年代にもつていた基盤の危機を増大させるだろう。（このことは、市民的政治斗争のより一層の変質あるいは、質的に異つた運動生み出す基盤でもある。）

六二―六三年にかけて、資本主義の心臓部におそつた階級斗争の大波は日本より一周期早く、上層労働者の矛盾の激化を激しい闘い、及び中間層のブジャード運動、そして農民の暴動（フランス・イタリヤ・イギリス）を生み出した。

ヨーロッパに於ては、上層労働者の矛盾の爆発が、ドイツ金属労働者のゼネスト、イタリヤ金属労働者の一ヶ月の闘い。フランス炭鉱、金属労働者のゼネストとしてさわやかに一周したのである。

日本に於ては、ヨーロッパに一周遅れて基幹産業労働者への死の労働（時間管理、近代的労務管理、弾圧）が本格化して来た。

ともあれ、上層と下層の悪循環（二重構造の上層は下層群からの搾取に立脚し、大巾賃上げ斗争、市民的政治斗争を行い、下層は無組織無運動により逆に自己を差別して来た）は、資本主義そのものによつて打ち破られている。五〇年代の運道の崩壊と来るべき運動の芽について決定的なものを情勢の中に見る事は未だ困難な様だ。

つつある。首切り、労働条件の切り下げによる労働者内部の競争を契機として資本が民社と完全に結合している。

国鉄では、機関区統廃、検修合理化の攻撃がかけられている。合理化斗争放棄の民同に対して、全体として若年化した国鉄労働者は、自然発生的闘いを行う中で、逆に、民同、佐々木、国労（民社）への大衆組織の政党への分裂を大きく生み出すだろう。全てでは、深夜便の設置及び、主要局に班長制度導入の攻撃がかけられている。

全通では、事務の合理化と、自動ダイヤルによる首切りの攻撃がかけられている、これに対し中央は、あいかわらず、労働ブランチ―長期計画により、職場支配―労働強化をゆるしている。

以上、配置転換、近代的労務管理、体制導入、職務給導入による職制支配によつて労働過程の資本の直接支配が着実に進行している事に対して総評は、「ヨーロッパ並みの賃金」で、しりをまくっている。

資本家階級のその様な搾取は、大企業本工労働者が、下層労働者の犠牲の上に大巾賃上げ、民主的権利を獲得していた五〇年代の基盤を崩しつつある。

他方、大企業臨時工は雇用契約中止首切りにより、民間大企業から放出され産業予備軍を龐大に生み出している。

中小企業零細企業は、自由化による産業再編成のあおりをくらつて系列化、倒産（赤字）しており、ヨーロッパに於けるブジャード運動の基盤を形成しつつある。下層労働者は、無運動と無組織によつて上層労働者との悪循環を五〇年代の特徴としていたが、かかる悪循環を打ち切る様な、アナキーな運動の萌芽が形成さ

III

だが、激動を回避させ、深部からヘゲモニーを貫徹させて来た資本家階級の諸政策により、戦線は、見るも無残な分裂を押し進めている。

いわば、「分裂の時代」である。これは、日本資本主義の特殊性に規定される階級構造と階級斗争の特殊性（その分裂性、分断性、自然発生的）の反映である。日本資本主義の歴史的転換に規定される、五〇年代の運動の崩壊と来るべき時代への過渡期の反映としての諸ヘゲモニーの再編成期である。

諸ヘゲモニー（政党組織）は、どの様な基盤に立脚しようとしているのだろうか。どの様に再編成されるだろうか。

太田、岩井ラインは、根底からゆさぶられている。そして、大巾賃上げ、雇用は、資本の厚い壁によつてますますささげられ、逆に自然発生的政治斗争に身をゆだねようとしている。同盟会議に、大単産を吸収されるといふ歴史のくり返しを強要されるか、或いは、自ら同盟会議に接近し、左翼を圧殺するかのせとぎわに立たされている。太田、岩井は後者を否定しているが故に、今春斗で見られる様に、反幹部斗争を社会主義協会、無党派左翼におおいたる事により（だが、社会主義協会に見られる様に、反幹部、反合理化抵抗斗争はやるが、太田、岩井を支持するという「クギ」をさしておいて）組合立て直し、資本からの自己保身を行うまでにおい込まれている。この中間主義は、崩壊を必然化させるだろう。

民同内部の宝樹路線（構改）は、労組幹部に依拠して、官僚化西欧型社民化―全労化にまい進している。

資本の攻撃に対する民同のこのような危機を職場で直感した結果が社青同の分裂であつた。社会主義協会派は、三池斗争のエネルギーに立脚している。彼らは、(特に協会派)は、太田・岩井の反幹部ラッパに忠実に従う事により、社会党主流の代弁者である構改派を「圧した」のである。だが、かかるエネルギーは、社会党大会前の取り引きとして利用されたのである。だが、社青同の動きは、職場、現場での活動家の危機を直接的に反映したものであつた。

一方、社会党大会は、直接的に職場現場の反映というよりは、むしろ、左派の後退のあがきといった性格であつた。

戦前合法左翼、労農派(協会)議会内左翼、等左派グループが構改派により内部をあらざれていることへの反発である。社会党の過渡的性格は、成田書記長に代表されている。すなわち、「基幹産業部門労働者を掌握しうるかどうか、それこそカギであり、党の方向を決すると」正しく基幹労働者を同盟会議に吸収されるか、或いは、自己が同盟会議に接近し、左翼を圧殺するか、このことが、社会党の今后を決定づけるだろう。

代々木共産党は、「敵は強く、味方は弱い」と資本との対決を避ける事により党を拡大して来た。資本家階級の攻撃の中心一合理化に対決する事を「組合主義」として拒否し、最賃制斗争を中心におくという間の抜けた方針で、資本の攻撃を避ける事により自己を守り、逆に資本制社会の「文化的もう点」をつくる事により又、基地斗争という資本にはいたくもかゆくもない「斗争」により組織を拡大して来た。だが、党拡大は、行きづまりに來ている。それは、資本の攻撃一賃金抑制、近代的労務管理、時間管理等が、

「点」に立脚している。(ちなみに、資本家も、サークル、ピクニック、カウンセラー、厚生、ピクニックスター等と同じ手口により労働者個人々々を掌握しているのだが)だが、彼らも、五〇年代労働運動の上層と下層の分裂とその矛盾に立脚することには成功したが、新しい労働運動の転換期には、どのような基盤に立脚しうのだろうか。

全労一総同盟一民社は、資本に従属する事により、現在の転換点を乗り切っている。

近代的労務管理、首切り、職務給、配置、時間管理等「ヨーロッパなみの搾取」を許す事により「ヨーロッパ型労働運動」への移行を遂行し、民同の地盤を、企業合同による組合合併、及び全国民連による内部工作を資本による全面協力で押し進めている。政党内の労働組合分裂という戦前の伝統を大々的に実行している。彼らが、基幹部門を掌握するかどうか(この事は総評の運命にかかれるのだが)は、今後の労働者階級の方向にとって決定的でさである。

だが、全労一総同盟は、資本による職場支配(労働者個人々々を組合をすどおりにして獲得)の上に存在している限り、国際競争戦のより一層の激化、日本資本主義の構造的弱性による基幹部門の矛盾の巨大な蓄積は、全労一総同盟によるヨーロッパ型への全体的な移行を許さないだろう。

IV

以上、労働運動の転換点に立つ諸ヘゲモニーの基盤とその方向の分析を行つて来たがそれでは、新左翼は、どのような局面に立つ

全く熾激しきわめて来たこと、及び、「文化的もう点」を資本が積極的に補充し、組合の部分的機能をのみつくしつつある事によつているのである。

それ故、苦肉の策として党中央は「農村月間」により、ブラグマチックに対応(もちろん中国派の無媒介な直線的な思考により)し、農村の分解とそれによる農本意識を持つた龐大な都市流出労働者に立脚しようとしている。

だが、これらの動きは、資本への有効な反撃にはなつていず、逆に、資本の高搾取によつて労働者の中に分解がはじまるのではないだろうか。だが、職場斗争への無方針の代りに、総評内部の分裂(自己同心円的)により、典型的な分裂期を遂行している。

又、鉄鋼、造船、国鉄、全電通等基幹部門で大細胞を持つている日共は、今春斗に於ける彼らの方向を見る時、組合の分裂を経、資本からバージされ、下層労働者、ルンプロという性格(一九三〇年のドイツ共産党の様に)をますます強くするであろう。かかる体質は、同時に、極右と極左の裏返し性格を形成する(中国派のヘゲモニーはそれにより立脚し促進している。)

ともあれ、彼らの基盤という意味に於ても過渡期である。

現在の労働運動へのもう点をついた組織一創価学会は、資本の熾激な攻撃を彼らなりに受けとめている。民同の様に中間主義的闘いにより、資本に労働者個人々々を握られ、組合自体がもぬけのから(賃金げをする機関一組合)にするのもなく、代々木のように、搾取に対して無関心でピクニックにより気やすめをするのもなく、正しく「指導部」によつては、全く解決されない「全人格的つながり」に立脚することにより資本制社会の「人間のもう

ているのか。

我々自身が、転換点に立つている。我々自身が、局面の変化に對して創造性を失つているのである。日本に於ける伝統的な、政党内の労働組合の分裂(上からの官僚主義的な分派抗争)という局面に對して創造性を欠いている。

民同に對する全労の民主的労働組合主義の再対置(上からの官僚主義的路線の対置)によるヘゲモニーの変化、それに対する代々木の階級的組合運動の対置、これらの過程及び結果としての職場活動、労働組合の空洞化、又、それらの諸ヘゲモニーに對する反幹部斗争、ストライキ委員会の対置。これらの対置主義は、もはや、一切の創造性を欠いた悪循環であり、戦前の彼党による組合の分断と資本による職場支配(戦前の場合は、産業報告会への組織されたのだが)のより一層の貫徹をまねくだろう。

革共同前進派は、日本資本主義の転換による労働運動及び、諸ヘゲモニーの転換点をそれなりに把握しているが、自己自身の転換点であることには全く無自覚であり、あいかわず(ストライキ委員会)反幹部斗争の対置で満足してしまつていゝ。又、M戦にしても、Mににしても、日韓談を対置する事によりなんとかと、局面に對する無自覚と主観主義も著しい。

指導性に官僚主義を対置し、それを一党派が握り、政治面まで切りまわす様な現状(分裂の時代)を止揚する為には、指導性そのものの回復が問題である。

創価学会が主張する「全人格的つながり」は、現在の指導部の對置主義がもたらす、指導性のそう失に對する痛裂な指適ではな

としている。まさしく資本のかかる動きは、賃金抑制、近代的労務管理、高搾取、民主的権利剝奪に対する矛盾が巨大に蓄積（死の労働）されつつある事の反映である。

我々は、単なる労働運動に於ける職場斗争の強調、反幹部斗争の強調ではなく、巨大に蓄積されつつある矛盾を媒介とした。恒常的な闘いの姿勢であり、思想である。賃金抑制、種々の合理化に対する徹底抵抗斗争であり、「失うべき何ものをも持たない」という言葉を生じて感じ取れる生活保障を闘いの根拠とした方向である。

五〇年代労働運動の上層と下層労働者の悪循環自体が、資本主義によつて変えられている局面に対して、新左翼メンバーは、連帯、指導性の回復の上に、少数派であろうと、全体的視野に立つて（コソプの中の波ではどうしようもない）、過渡期に形成されつつある矛盾の巨大な蓄積に対して、大胆に「実験」を試みなければならぬ。でないなら、単純対置主義に陥り、転換点によつて創造を全く失つてしまふだろう。

上層労働者には、諸々の合理化、労務管理、賃金抑制、権利剝奪等に対する徹底的、展開性をもつた職場斗争と、組合から独立した労働者政治組織による広い視野での闘い、下層労働者には、全人格的要求と即時的団結から出発する。

我々は、今春斗を契機として、全国的な新左翼の連帯と、新しい「実験」を試み、その中から立脚すべき芽を形成しなければならぬだろう。

V

一 経済斗争が斗われた。それは、「下へ落ちたくない、自らの既得権一賃金を獲得する」という「エゴ」の資本家階級の政治的攻撃（既得権ハク奪）に対する反発であった。その反発が「政党的ゲモノ」の弱さ、及び、労働組合の弱さの反映としての政治的課題を掲げての統一という補完的意味、そして、斗争の自然発生性（意識的指導の欠除）街頭性とその中の市民の我インテリの（ゲチニーとの結合という事態により市民的政治斗争としての性格を持つたのであった。

VI それでは、安保斗争以降政治斗争の性格はどの様に変り、更に、今後、どの様な政治斗争の性格を持つてあろうか。

六一年の政暴法斗争は、安保斗争の余塵であった。六三年のボラ潜斗争は、白共のカンパニイ集会和関西学生との闘いを主体として、安保以降の「市民主義」そのものの変質、すなわち、市民主義が、「左翼」としてストレートに、政治過程に登場しえないという事態を示した。

又、六三―六四年の社共の動員カンパニイ主義は、共産にあっては、第九回原水禁大会以降現られた、小ブルの切り捨てた同心円の拡大であり、社会党にあつては、大巾賃上げの経済的基盤の縮小と逆に「やむを得ぬ」政治カンパニイ集会による、しよばくれた統一であった。

これらの性格は、反動立法による攻撃というよりは行政的な裏からの暴力装置の強化、企業の労務管理体制の強化という攻撃の性格にも規定されたものであった。

いわば、来るべき政治斗争の性格を規定する決定的要因を明白に示していない。

以上、労働者階級の現状―資本と賃労働の闘いの局面労働運動の転換点―その過渡期の動向を分析したが、次にそれらを前提にして、政治斗争の性格について若干の考察をしよう。

五〇年代の政治斗争の性格は、市民的政治斗争であった。安保斗争は、五〇年代の運動の全面開花であった。

日本の政治斗争は、第一期、四五年から四九年まで、いわゆる革命の高揚と退潮として、要求提出 ↓ ストライキ ↓ 生産管理 ↓ ゼネストという革命の法則の一端を示した時期、第二期は五〇年から六〇年まで、その前半は、地域人民斗争方式として、しかし、破防法斗争の中にすでに来るべき市民的斗争の萌芽が形成されていたという意味に於て、過渡期であった。破防法、内難等を通じての電産、炭労ストの中に、四九年の大敗北以降、顕存化した戦後の日本型二重構造が急速に形成されそれによつて市民的政治斗争の性格が形成されつつあった。五五年以降の后半は、大企業本工とそれ以外の部分（臨時工、社外工、中小零細企業労働者）への分裂を基底にしての、上層を中心としての大巾賃上げ、経済斗争と、他方、資本家階級の政治攻撃に対する反発としての市民的斗争であった。警職法から安保斗争に致つて全面開花したのだ。

安保斗争以降、政治斗争の性格は、第三期に入っている。それは、五五年以降の龐大な近代的投資が一循し、更に自由化による産業再編成による労働者階級の構造の変化、二重構造の変化に規定されている。

すなわち、五〇年代特にその後半にあつては、すでに述べた様に上層と下層の悪循環により、上層を中心として、大巾賃上げ

現在の過渡期から、次の政治斗争の波、その性格を規定するものは、国際競争に於ける、日本資本主義の矛盾の深度である。資本主義の構造的再編による諸階級の価値観の転換を資本家階級は「思想と暴力」の巧みな操作によつて、諸階級の一点への統一を遂行している。いわば、資本主義の再編成によりばらばらになり無政府化する国家を（戦後の西欧民主主義の再編成をも含めて）帝国主義的価値観により一点に統一しようとしている。中央集権的な秩序の上への形成である。この様な秩序形成が、国際競争に於ける強力なパンチをくつて失敗したなら、Fからの強力な秩序（フアシズムともいうべきもの）が資本家に取つてかわるか、あるいは、労働者階級による全く新しい秩序が形成される。国際競争に於ける日本資本主義の力量は資本家階級をヘルギの様な性格にきたえ上げるだろう。それは、分散している価値観（生活）を暴力的に粉碎する事に対する自然発生的反抗を呼び起さずにはおかない。極めて暴力的狂暴な資本家階級の政治的攻撃に対して、根底から（生活そのものから）の苦しませの自然発生的性格を持つてはならないだろうか。

もうすこし具体的に転開して行こう。

五〇年代の市民的政治斗争は、すでに述べた様に、上層と下層の悪循環の一反映形態としての上層の既得権防衛―民主主義斗争であった。

上層は下層労働者からのさく取により経済斗争と市民的斗争を闘い、下層は、無組織、無運動の故に上層の運動を抑制し、自らを差別して来た結果であった。

り上層労働者自身の賃金斗争の行きづまり、と合理化による高さ
く取、及び、既得権を立法的（反動立法）にハク奪するのではな
く、労務管理の強化、行政的に暴力装置を強化する事により既得
権を除々にうばわれているのである。

五〇年代の様に上層労働者は、安楽に暮らし、時と、既得
権防組織斗争、市民的的斗争を行つていけばよいといった性格
は、もはや終りをつけている。

高き取と行政的な暴力装置と既得権ハク奪によりグイグイと
おい込まれているのである。この様な攻撃に対して、全労は言
うにおよばず、民同、日共も抵抗斗争を放棄し、資本のなすがま
まに、おい込まれている事（賃金抑制近代的労務管理、民主的
既得権のハク奪）は政治斗争の波が、既得権防得し市民的斗争の
性格というよりは、むしろ、「おい込まれて爆発する」という
性格を持たざるをえないだろう。

もちろん、日本資本主義の後進性（二重構造）に密着した近代
主義、市民主義が、高揚の局面で社共と結合する事によつて「お
い込まれて爆発する」というエネルギーを吸収してしまふ事は
充分考へ得る。それは、我々自身の今後の政治斗争の指導にかか
つていゝ問題である。

王子争議が警職法とその斗いをもたらし、海外市場要求が安保
改定とその阻止斗争をもたらした。現在激化しつつある国際競争
は、日韓会談とその阻止斗争、そして全体として憲法斗争を生み
出そうとしている。矛盾の集中点に着目し、運動の波を主体的に
切り開いていかねばならない。

（なお、学生運動の諸任務については、戦士「二、三合併合」主

現代革命論②

現代革命史ノート
ドイツ革命の敗北とローザ

(1) はじめに

我々が一九一八年のドイツ革命の敗北を取上げ、ローザを新ら
ためて取上げようとする意図は、もちろん、レーニン、トロツキ
、（そして当時はスターリンをふくめて）が「ドイツ革命にか
ける」ことによつておくれたロシアがドイツ革命を突破口とする
世界革命によつてはじめて社会主義への方向を取ることができ
るとした意図がくづれ、かかるドイツ革命の敗退を契機として一國の
社会主義が正当化されスターリンが勝利していつた過程をたどり、
その事がその後のコミンテルンを通じる全共産主義運動に影響を
与えたという点で、まさに世界的な出来事であるからである。

それ故、我々の目標はもちろんドイツ革命を学者的に取り上げる
事ではなく、特に人民戦線一構造改革（トリアッティ略線）へい
たる、現在の修正主義の評価という点に向けられている。そのよ
うな作業の一貫として、先号でイタリヤが取上げられ、次号では
フランス人民戦線が予定されている。

今述べたように、ドイツ革命の敗北は、その後の共産主義運動
をスターリニズムに毒す事となつた客観的な条件の主要な内容を
なしており、それ故ドイツ革命のロシア、コミンテルンに与えた



影響という点からも検討されねばならないが、それ以後の革命の
失敗（中国とキューバを除く）一特に社会主義の基礎となるべき
高度資本主義に於ける一が単にかゝるスターリニズムの影響だけ
で説明出来ない以上、ドイツ革命の中から、いわば現代革命の法
則とも言うべきものを抽出することが必要であると思われる。問
題を単にスターリニズムの影響（それは確かに、ヒトラーとの斗
争に於けるドイツに於いて、フランス、スペインの人民戦線に於
いて、戦後の革命情勢に於いて決定的役割をはたした）という点
にのみしぼることは、問題の過程と結論とを混同し、一種の「裏
切り史観」に導びかれ、かつてのブントがそうであつたようにス
ターリニズムからの分離、弾がいに終つてしまつてしまつてある。

ここでは、むしろ、視野を先に述べたスターリニズムとの関係
といつた点は一応捨象して、いわゆる高度資本主義国に於ける革
命の形態という点からドイツ革命へアプローチする。その事は現
在、高度資本主義国に於ける革命として提起されている構造改革
路線に対する間接的な批判となるであろう。

ドイツ革命の開始は一九一八年十月二十九日シリツヒ埠頭での水
兵の反乱、そして十一月三、四日のキール軍港に於ける水兵の反
乱を合図として全ドイツに拡大していつた。そしてこのような労
働者階級の激しい斗争、革命的情勢は全国に於ける不均等な発展

テンボにもかゝらず、一九一九年四月のミュンヘンに於ける協
議会（レーテ）独裁とその徹底的な抑圧、破産（五月一日）まで
続いたのみならず、二一年、二三年にも革命的情勢が訪ずれ、そ
れが主として、アメリカ資本の援けをかりて相対的安定にいたる
のは二四年以降にすぎない。そしてこの間のドイツ革命の流産に
現われた諸特徴は、この相対的安定期を破つた二九年恐慌以降の
ヒットラーの登場とファシズムに対するドイツプロレタリアートの
完全な敗北にいたる階級斗争に一貫した連続性をもつて貫徹し
ている。

かかるドイツ革命の連続性は例えば「極左派の妄動が極右派の
反撃を強化し、極右派の反撃がいよいよ極左派を妄動に駆りたて
るというドイツ革命 反革命の悪循環はこのようにして、ファシ
ズムの勝利までつづくのである」（猪木正道「ドイツ共産党史」
二〇二頁）という形でも確認されている。

確かに、一九一九年のドイツ革命に現われたスバルタクス・ブ
ンド（ローザ・リーブクネヒト） 独立社会民主党左派（革命的
オプロイテ）、これに敵対するルンペン・プロレタリアートや没
落してゆく小ブルジョアを組織したフライコール（義勇軍）の激
発的な軍事斗争、そしてこの両方の中で、基幹部分の労働者階級
の支持のもとに存在し、支配的地位にある社会民主党というタイ
プは、一九二九年以降ドイツ共産党とナチスが失業者を二分し、
それぞれの突撃隊による軍事的対立の中で先づドイツ共産党が
たづけられ、その後両者に対する中立的立場を持して動かなか
つた基幹労働者組織労働者 社会民主党が一戦もまじえること

分離されている。すなわち、人民戦線―構造改革は、結局、労働
者の統一の名によつて戦斗的部分の犠牲に於いて基幹部分（上層
労働者）、都市中間層のヘゲモニーのもとに、人民戦線政府を支
持した。そしてデイトロフの七回大会での報告（「反ファシヨ
統一戦線」国民文庫）でも明らかのように、この人民戦線は、戦
術として提起され、それと別個にプロレタリア独裁への準備を行
わねばならないとされているが、この関連は不明確であり結局、
実践的には、戦術の方に重みのあつた事はまことに当然であり、
そこからして戦後は反ファシヨ、民主主義、社会主義革命という
連続性が追求されるのであるが、そのヘゲモニーの問題が変化し
ないならば、それは無意味である。

だが、もちろん、我々は労働者の統一がスバルタクスやドイツ
共産党の基盤となつた失業者軍や、急進的小ブルのもとになされ
ると考えているわけではない。そのような道はずでに人民戦線が、
いかに強弁しようとも民主主義―社会主義へと転化し得ず敗退し
たと同じように歴史は失敗する事を教えているのである。

このような二つのコースが失敗したとするならば、どのような
ヘゲモニーによつてどのような形態によつて労働者の統一はなさ
れるかという問題は現代革命にとつてきわめて重要な問題だと思わ
れるのである。革命が、全労働者の事業であるとするならば、確
かに基幹部分の労働者（それは、ほぼ組織労働者と同一だが）こ
そ、その主たる荷い手であることは自明の理である。にもかかわ
らず一九一九年のドイツ革命で、スバルタクスは、この部分に影
響力を保持することきわめて弱く、影響を拡大した時は、好機を

なく敗北していつた過程とピツタリと対応している。ただ前者に
於いて、フライコールの指揮者は社会民主党のノヌケであり、そ
してともかくもその後のドイツ帝国主義の復活による安定によつ
て彼等はフライコールによつて死へ追いやられることなく、逆に、
それを解体し、しばらくはブレッツシャールグループ（シュトゥルム
タール「ヨーロッパ労働運動の悲劇」）として存在を許されてい
た。逆に後者においては、ヒットラーに引きいられた無法者たち
は、自己を金融資本の最も狂暴な代理人とすることによつて独共
産党はもとより、ブレッツシャールグループとしての労働組合 社会
民主党の存在をも否認し、ファシズムの勝利を確立したという相
違があるにすぎない。

だが、このファシズムの勝利は、その後の国際共産主義運動に
根本的な転換を迫つた。人民戦線戦術の提起がそれである。それ
は、先ず、仏共産党の転換に端を発し、一九三五年のコミンテル
ン七回大会に於いて自然発生的に開始されたこの転換を承認する
という形でなされた。この流れは現在イタリア共産党によつて代
表される構造改革路線として体系化されている。そして彼等の問
題意識は「労働者の統一」（ヴァイトリオ著、合同出版）という点
にしぼられている。

確かに労働者の統一はファシズムの勝利が労働者内部の分裂
対立によつてはじめてなされた以上決定的な問題として登場した
事はまつたく当然の事であつた。だが、問題はこの統一がどのよ
うなヘゲモニーによつてなされるかという点にこそ存在している。
そして我々と構造改革とは、この解決の方向によつてきつぱりと

いつしていた。（三月ゼネストの失敗）、二九年以降のファシズ
ムとの年事に於いても組織労働者は、ついに社民から離れること
なく、一戦も交えずに敗北した。かかる事実にもかかわらず、こ
の部分共産党に起上りブルジョアジーをふみ倒すであろうことは
何の疑いもない。ただ、そのためには、ある客観的条件と、主体
的な準備が必要であるというにすぎない。

それは何か？
更に、我々のかかる問題意識は、以然として安保斗争に於ける二
つのコースのイメージがくつきりと脳裏にこびりついている事に
よつてゐる。即ち、

安保斗争に於ける、五・一九以降の民主主義擁護斗争―中広主
義、国会解散―総選挙の要求と、それに対するフロント 全学連の
安保紛争―岸内閣打倒のラジカルな斗争の対抗 相互滲透に表現
された二つの道を、どのように止揚するかという点である。日本
の政治斗争は、このように安保斗争に現われた二つのコースだけ
ではなく、すでに、遠く自由民権運動に於いても、そして明治三
十年代から幸徳事件にいたる過程でも、大正デモクラシーから大
杉のアナルコサンジカリズムの時代にも一貫としてこの対抗関係
は存在していたのである。この事は、確かに、日本資本主義個有
の二重構造に根源を持つと同時に一方で高度資本主義國に於いて
現われる労働者階級の分裂という一般性、共通性、特殊日本の形
態であるという点に於いて、我々はかゝる分裂を止揚する条件に
も、共通項が存在していると考えるのである。事実、安保―三池
に於ける中広主義 民主主義擁護斗争は、基幹労働者の利益を迫

求する民同運動のもとにあつたのだし、他方、三井三池とブンド
I 全学連は、独占資本と同時に、かかる基幹労働者の利益を目ざ
す組合運動との二重の疎外の中でその抑圧をはねかえそうとする
部分の根源的なエネルギーを解放しようとするものであつた点で
先に述べたドイツ革命との共通性を有しているのである。

以上のように、我々が、ドイツ革命を取上げようとするのは、
それが現代革命におけるある共通性を保持した一典型的な革命で
あると考えるからである。実に、ドイツ革命の流産とローザ・ル
クセンブルグの死は、現代革命の悲劇の序曲である。

(2) 一九一八年ドイツ革命

以上の事を前おきにして、ドイツ革命を具体的に検討すること
にしよう。

① 篠原一氏は、その「ドイツ革命史序説」に於いて、ローザ
の死をもつて終る一月斗争以降の大衆の革命的エネルギーを
高く評価し、一月斗争以降をもふくめてドイツ革命の「放散」
を明確にしなければならぬとされる。この評価は、ともか
くとして、我々の問題意識からするならば、さしあつて一
月斗争までに、すでにドイツ革命敗北の原型は見取れると
いう点で、一月斗争までを検討する。

の社会主義者のもつとも議論の与地のない、もつとも基本的な義
務、すなわち、革命的情勢が現在あることを大衆に明らかにし、
その情勢の広さと深さを説明し、プロレタリアートの革命的自覚
と革命的決意を呼びさまし、プロレタリアートをたすけて革命的
行動にうつらせ、こういう方向にむかつて活動するために革命的
情勢に応ずる組織をつくりだすという義務である」(同、二二一
頁)

そして、やがてかかる革命的情勢の到来した事は誰の目にも明
白となり、「敵は国内にある」(リーブクネクト)ことが気づか
れはじめた。

ドイツに於ては、特に一五、一六年にかけての冬期の食糧不足
は深刻化し、大衆の不満は増大し、それに共なつて、先づ、SP
D 代議士会から分裂が生じた。すでに八月四日の軍事予算以降何
回かの戦事予算の国会呈上に対し、除々に反対派が増加し、つい
に一六年三月二四日の緊急予算案をめぐつて社会愛国主義者と社
会平和主義者が分裂し、後者は、やがて独立社会民主党(USPD
D)を結成した。更に増大する大衆の不満と不利な戦況の中でSP
D も又、他のブルジョア政党と共同し「話し合いによる平和」
をめざし帝国議会に和平決議案を成立せしめるにいたつた。(一
七年七月)

このような上方の動きと別に、大衆運動も革命的オプロイテの
指導下に成長しはじめた。この革命的オプロイテはベルリン金属
労働組合の左翼反対派によつて一六年に結成されたが、彼等は最
初意識的には社会平和主義者としてUSPDに参加していた。し

一九一四年八月四日は、オニインターナショナルの崩壊の日で
あつた。いまや、日和見主義は、社会擬外主義に転化し防衛戦争
を云々しはじめ、この日の帝国議会で、ドイツ社会民主党(以下
SPD)は、軍事予算に賛成するにいたつた。SPDは、エンゲ
ルスさえ引合いに出してと 絶対主義に対する防衛戦を合理化
した。

周知のように、大戦前、オニインターは、何回となく帝国主義
戦争に対する斗争を宣言していた。例えば、一九〇七年のシュツ
トガルド大会では、ローザ、レーニン、マルトフの共同提案にか
かる次のような宣言を承認している。「万一、右のような(反戦
の種々の斗争筆者)努力にもかかわらず、戦争が勃発した時は、
労働者階級は戦争を速かに終了せしめるために努力し、かつ全力
を挙げて、戦争によつて惹起された経済的および政治的危機を国
民各層の政治的攪乱に利用し、かつ資本主義的階級支配の覆滅を
促進すべき義務を負う」

社会排外主義に転向した部分の云い分は、かかる社会的危機は
存在していないという点にもあつた。これに対してレーニンは「
オニインターナショナルの崩壊」で、オニインターの破産を宣言す
ると共に、これに反論した。かかる危機は「疑いもなくやつて来
た」(レーニン全集二二・二九九頁)そしてこの情勢を革命に導
びきうるか否か「それは我々は知らないし、誰も知ることはでき
ない。経験だけが、先進的階級であるプロレタリアートの革命的
気分が発展し、革命的行動にうつっていくことだけがそれを示す
であろう」(同二二頁)「いま問題になつてゐるのは、すべて

かしUSPD 国會議員団が、平和をとえざるのみで域内平和を打
破ることのないのに対し、オプロイテは平和のために、スト、デ
モ等の実力にうつたえねばならないとする点で決定的に異なつて
おり、それ故、彼等は、斗争を通じて左翼化してゆくのである。

ともあれ彼等の指導下に先づ、一六年六月才一回目の政治ストが
執行され、ベルリンの労働者五万五千人が参加した。更に一七年
四月才二回、一八年一月に才三回目と斗争は拡大し、この一月の
斗争にはベルリンで五十才の労働者が参加したただけではなく全国
の主要な都市に広まつてゆき全ドイツで百万の参加があつたので
ある。この一月の斗争は軍隊の弾圧によつて一応は終息したが、
ドイツ軍が三月から開始した春季攻勢に失敗し、やがてオースト
リア、ブルガリアの降服と続く中で、ついに、この軍隊内部にさ
え厭戦気分が充満するにいたつたのである。かくて、ドイツ参謀
本部は、九月和平交渉とその前提としての民主化を決議するまで
にいたり、十月にはマックス公を首班としてSPDのジャイデマ
ンをふくめて事実上の議会責任体制内閣が登場し、そのもとに下
から盛り上り成長しつつある、平和と国内改革の要求を上からの
ヘデモニーで去勢しようとする策動が本格化するにいたつた。だ
が、彼等がカイゼルの退位問題でもたつく間に、下からの大衆の
斗争は、一月三日のキール軍港の水兵の反乱に端を発し一挙に
全国的に拡大し成長していった。

ベルリンに於いても、一月九日、ほとんど自然発生的に大衆
は街頭にあふれ出て、かくてSPDのジャイデマンは、上からの
策動のおくれをとりもどし大衆のエネルギーを去勢するために、

独断でもって、国会のバルコニーから共和国の成立を大衆の前に宣言したのである。

この一月九日の後、革命のコースを象徴する二つの機関が設置された。一つは、内閣 人民委員協議会であり、これはSPD、USPD各三名づつ六名によつて構成されエーベルトが首班になった。一方、大衆は九日街頭へ出たが、革命的オプロイテは、彼等に対し翌十日ブツン曲馬館に於いて労兵協議会（レーテ）を開催する事を提案し、十日、労働者四名につき一人、兵士一個大隊につき一人の割合で選出された代表、三千名によつてレーテは開催された。だが、このレーテは、スパルタクスやオプロイテの予想に反し、社会民主党の支持が圧倒的多数をしめたために執行協議会を独占しようとするオプロイテの意図は坐折し、オプロイテ、SPD各七名、兵士代表一四名、計二八名の構成となり、しかも兵士代表はおおむねSPD支持であつたからオプロイテは少数派であつた。

しかし、この十月の段階では、レーテこそ人民を代表するものであり人民委員協議会はそのもとに行政を担当するものとされてきた点で、革命の盛り上がりを知る事ができる。そして又、ロシア革命に於いても当初、ボリシエヴィキはソヴェイト内の少数派であつたからこの事は、革命の進展状況の当然の帰結であり「ドイツ革命のこのありさまは、ドイツ国内の諸関係の進展の度合に、そのまま見あつている」（ローザ選集四、六二頁）のであつた。

このようにして成立した人民委員協議会とレーテの二重権力状況は、このドイツ革命の進路を示すバロメーターであつた。この

二月革命以後変化し、七一年のバリ・コンミュニオン、一九〇五年の才一次ロシア革命を過渡期として、このドイツのレーテ、イタリアの工場委員会等によつてはじめて高度資本主義国に於ける自己権力の原型が表現されたものと思う。

イギリスのビュリタン革命に於けるクロンウエル軍は、周知のように、その主力をヨーマンによつて構成されていた。それは、まったく当時の歴史の発展段階に照応している。このヨーマンは、すでに一四世紀末には農奴から解放され、分割地農民となつていたが更に、革命期の一七世紀にはマニユファクチュアブルジョア階級へ転化する部分とプロレタリア階級へと階層分化が進行しつゝあつた。かくてビュリタン革命は、このマニユファクチュアブルジョアの指導のもとに広範な農民の同盟によつて達成された。ブルジョア革命は、それが、いまだ農民層の分化をふくまぬ限り成立しない。絶対主義は、小営業の段階にいたつて成立、発展するが、ブルジョア革命は、すでにかかる小営業の分化によつてマニユファクチュアブルジョアの転化 成長によつて彼等の指導のもとに、はじめて成立するのである。だから必然的にこの革命の主体の内部には、分裂を内包しており、プロレタリアに転落する部分は、革命の過程でその指導者を突き上げ先へ先へと転落する部分、革命の意図をこえて激発するが、彼等の（二歴史の）未成熟によつて自己を象徴することができず、指導者の裏切りに会うのである。イギリスでは、クロンウエルの水平派に対する裏切りとして、フランスではジャコバンの敗北として現われる。そしてクロンウエルはロツクによつて理論化され、水平派一

対抗関係、同じことだが、レーテ内部に於いて「少数派である事を卒直に認めた所から出発して多数獲得へ」（レーニン四月テーゼ、全集二四）という方向に於いてのみドイツ革命の進む方向があつた。そして、オプロイテもスパルタクスも、この方向へ進んでいった。だが、彼等は、ある時に、しゅんじゅんしてテンポにおくれ、ある時は、時期尚早の決戦に打つて出ることによつて粉砕された。その中で、ローザのみが、冷静に革命の進展を見守り、最も正しい方針を提起していた。だが、彼女の依拠する部隊は、その方針を認めなかつた。それは革命の発生した段階での技術的手段ではいかんともしがたい力であつた。問題は、この革命にいたるまでの全過程に於けるローザの理論と実践にかかつている。レーニンは、「おそすぎた分離」と書いた。だが、それは結論である。

しかし、このローザ理論の検討は、いましばらく後にまわさねばならない。

(3) ドイツ革命の産物「レーテ」とは何か？

ところで、このレーテとは何であらうか。すでに前号竹野論文「イタリアとジャコバン」で明らかかなように、これこそ現代に於ける唯一の労働者の自己権なのである。この自己権力の萌芽はすでにブルジョア革命の段階で見取れる事ができる。だが、私の考へでは、このブルジョア革命に於ける自己権力は、一八四八年の

ジャコバンはルソの永久革命によつて、その思想的代弁者を見出す。だから、この水平派ジャコバンは、まさにプロレタリア化された農民 プロレタリアートの萌芽であるだけにプロレタリア革命へ無限に接近しているが、まだそれに質的に飛躍していない。転化するためには、自己を市民から区別しなければならぬ。そして、それは一八四八年の二月革命の課題であつた。ともあれブルジョア革命では、大衆の自己権力とは市民軍として現われている。フランス革命では一方進んでバリの区を基盤としてコンミュニオンがジャコバンの指導下に結成されている。四八年の六月事件によつて、プロレタリアートは自己を市民から区別し、敵の団結を一方強固にすることによつて自己の敵を明らかにしたが、その形態は、フランス革命とかわつていない。クロンウエル、ジャコバンの段階では、いわば、ブルジョア化した農民と、プロレタリア化した農民との指導 同盟一対立への発展であつたが、この六月事件では明確にプロレタリアートは、ブルジョアと敵対した点に歴史の進展を見て取る事ができるのである。

この斗争は、マルクス、エンゲルスに対して質的な変化をもたらし、従来の急進民主主義の残りを取り去り、永久革命を放棄したのである。マルクスは、すでに「ヘーゲル法哲学批判序説」に於いて、はじめてプロレタリアートのヘゲモニーを確認していた。それはまさにドイツ革命に当面して、すでにドイツブルジョアにその革命のエネルギーの存在していないことの確認を通じて、ドイツ革命の荷斗としてプロレタリアートを「発見」したのであつた。それは無限にプロレタリア革命に近似しつゝそれに転化し

得ないルソの永久革命論を転化した形態に外ならない。

だが、マルクス、エンゲルスは、二月革命の総括を通じて、この立場を放棄した。「フランスに於ける階級斗争」へのエンゲルスの序文は、その事を物語っている。「歴史は、われわれおよびわれわれと同じように考えたすべての人々が間違っていることをあきらかにした。当時はまだ大陸における経済的發展は、資本主義的生産を廃止しうるほどに成熟した段階には、とうてい達していなかったのだ。歴史はこのことを一八四八年以来大陸の全土を捲きこんだ経済革命によつて、証明してみせた。フランス、オーストリア、ハンガリー、ポーランドに、また最近ではロシアに、大工業をはじめ根づかせ、そしてドイツをまさしくオ一級の工業国に仕上げた経済革命—この革命の全体は、資本主義の基盤の土で、おこなわれた。したがつてその基盤は一八四八年にはまだ、大いに伸びる力を持つていたのだ」そこから、必然的に、プロレタリアの独自性二組織の問題が提起されねばならなかつた。けれど、永久革命論のように、いわば自然成長的に發展する革命の中で、ブルジョアジーを追いついて、小ブルジョアを突き上げつつ、革命を急進化させ、あたり限り前進しようとする事はついに権力の獲得までいたる事はできなかつたからである。②

① 永久革命論は、トロツキーに結びつけられて理解されているが、ここでは、一応マルクスに於けるそれを検討したのみでトロツキーのそれは、ワケ外である。ただし、恐らく、トロツキーの組織論上の弱点は、その永久革命論と無関係でないと思われるが、ここでは保留しておく。ドイツチャー著

「武装された予言者トロツキー」を一読されたい。

ここで提起されたプロレタリアの独自性 規律性、組織性 前記党の問題は、国際労働者協会(オ二インター)の設立として試みられたが、マルクス、エンゲルス、就中、マルクスは、それを完成する事はできなかった。それには歴史は十分成熟していなかつたのである。パリ・コミューンは、かかる過渡期の斗争であつた。

ここに提起された問題は、更にエンゲルスの指導のもとに、ドイツ社会民主党とオ二インターとして組織化されていつた。エンゲルスの「フランスの階級斗争」への有名な序文は、明白に、永久革命の放棄を語ると共に、日程に登りつつある現代革命の問題性を示唆している。彼は、普通選挙の有効な利用によつて国家機関に進出し、逆にそれと戦う事がからとなると説き「ブルジョアジーおよび、政府は労働者党の非法活動よりも合法活動のほうを遙かに怖れ、叛乱のなりゆきよりも選挙のなりゆきのほうを遙かに怖れるといつたしまつてきた」と述べ、そして、それに続いて、軍事技術の発達によつて、もはやバリケード戦によつては、支配者に打ち勝てないとしたのであつた。しかし、これは過渡期の産物であつた。③

④ かかるエンゲルスの言葉に対して、一方では老エンゲルスは日和見主義になりつつあつたという批判と、他方では、構造改革派によつて、構造改革の萌芽といつた とりあげ方がなされているが、それは、いづれも時代的影響を抜きにした訓話学的解釈にすぎない。

このような、オ二インターの立場は、カウツキーの「権力の道」に於いて体系的に展開されている。

カウツキーは、その著作の中で、資本主義の發展そのものが労働者階級の数的増加をもたらし「国民中の革命的分子の優越をいよいよ大きく形成するよう」と作用している。「し「権力への道」世界大思想全集 二三五頁)だが、それは「さし当つて可能性において革命的であるにすぎない」(同 二三五頁)として、かかる労働者の権力への道は「まずオ一に……多くの社会改良すなわち労働者保護に向けられる」(同 二五〇頁)そして、それは「労働組合方式の大斗争によつて準備され強要され」逆にかかる斗争は、資本家の反撃によつて政治斗争とへ發展してゆき「このようにして、政治生活においては政治上の諸権利をめぐる斗争が前面にあらわれる」(同 二五〇頁)そして社会民主党は、かかる大衆を指導し、多数を獲得して権力へ(ローザ「ロシア革命論」と進まねばならない—これがカウツキーのおよその見解であつた。

そして、この立場は、カウツキーも述べているように(「権力への道」序文)レーニン、トロツキー、ローザも承認した道でもあつた。だが、これは、トロツキーが「過渡的綱領」で述べているように、まさにオ二インターは、革命を日程にのぼしていなかつたからである。それは、帝国主義段階への過渡期としてのバリコミューンから一九〇五年オ一革命の時代に照応している。まさに、現代革命は、永久革命—オ二インターへと發展した、革命思想 組織の發展、組合、いわば否定の否定でなければ

ならなかつた。⑤ オ二インターのコースによつても、単純な永久革命への逆もどりによつても問題は解決し得ないのである。この否定は組織的にはレーテによつてのみ実現される。得るであろう。実に、この小話は、この事をドイツ革命の中から論証しようとする事にその目的がある。

以上、やや長々と述べたが、我々は革命思想史を一般的に語るうというのではなく、まさに現代革命の問題を、かかる脈路に於いてつかんでおくことが必要であると考えたからに外ならない。⑥ 先走つて云つておけば、ローザは、かかる現代革命が日程に登つた事を見て取つていた。一九〇五年のロシア革命を契機に、「マッセンストライキ、党および労働組合」が書かれた事は、その事を象徴的に物語る。だが今や、成立したレーテの運命が、どのような経路をたどつたかを見る事によつて、検討しなければならぬ。

(4) 「レーテ」の空洞化と革命の坐折

先に述べたように、一一月九、一〇日の段階では、国家権力は、形式上レーテに移行した。だが、その内容は、圧倒的にSPDのものであつた。ところで、このレーテ成立以前の支配層を構成していた資本家カイゼルトウム(軍隊、官僚)の動向はいかなるものだったであろう。

資本家は、すでに一九一八年、戦争の敗北と、大衆の革命化を見こして方針を検討していた。そして彼等は、現在のカイゼルを支持し大衆と戦う事はできないと考えその同盟者を労働組合に求めるにいたつた。かようにして革命前の一月二日には産業団体の代表と労働組合が会合し、協議体の設置が同意されるにいたつていた。革命後、資本家は、労働共同体としてそれを早急に実現し、八時間労働制等広範な諸権利を労働組合側に許容したのであつた。更に、ブルジョアジーにとつて労働組合 SPD は、彼等の延命のための最後の手段であつた。これに反してロシアのブルジョアジーにとつては事態は異なつたものであつた。ロシアに於いてもフアーリは二月革命に於いて、何の抵抗もなく、くされきつた死体のように崩れ去つた、その時点まではドイツとかわらない。だが、彼等は、結局ドイツブルジョアジーが見出し得た労働組合という同盟者を見出す事はできなかったのである。

それでは軍隊はどうであつたらう。この軍隊は、ほぼ三つに分かれる、オ一はカイゼルを頭にいただきヒンデンブルグ・グレーナに引きいられた特権団であり、おおむねユンカーの出身として反動的であつた。そして彼等は、革命運動のおおりで解体しつたあつたといへ、運動にふれる事の少なかつた前戦部隊を掌握しベルリンに帰る事によつて革命を弾圧しようという意図を持つていた。この前戦部隊がオ二のものである、しかし、国内の守備隊は兵士協議会を放置して、これとは異なつた動きをしていた。いづれにしろ、参謀本部は、革命運動をより恐れる SPD にかくまれる事によつて存在し得ていた。ここでも又 SPD の存在こそ

は、ユンカー特校団の存在を許した決定的な要因であつた。まさにプロレタリアートは、かかる社会民主党を徹底的に暴露し斗争する事によつて敵を團結させ、ブルジョアジーの放逐とユンカー特校団のにぎる暴力装置との軍事的斗争に発展させることによつてのみ勝利への道は存在してしたのである。

さて以上のように反革命側は、SPD を要として結束していたが、それでは労働者階級の斗争は、これに対して、どのような発展をとげたのであろうか。それは、ほぼ、三つの時期に区別できる。

オ一期 一九一八年一月九日―二月六日

オ二期 二月六日―二月一日、二月二四日

オ三期 二月二四日、一九一九年一月四日―一月五日

④ ローザの云う通り、大きく一―一八―二〇、一四―一二

・一四―一〇、一五とわかる事もできる。(選集四「綱領について」なお、この間については、特に、ローザ、スバル

タクスの動向に注目し、その敗北の過程を見てゆく。

オ一期 この間には、これといった斗争は存在せず、それ故、各組織にとつては大衆を教育し自己の組織を打ちかためる期間であつた。

だが、この間にも、先に述べた革命運動の二つのコースを組織的に表現する人民委員協議会と執行協議会(レーテ)との関係では、徐々に、レーテを骨抜きにし、人民委員協議会に権限が吸収されつた。一〇日のベルリン協議会の翌日、執行協議会は次のような告示オ一号を出した。「すべての地方自治体、地方、

国家、軍事機構は、その活動をつづける。ただし、それらの行政機構は、労兵協議会からの委任により指令を発するものとする」と。だが、すでに一月二日、この権限は行政権は人民委員協議会にあることとなつた。そして更に、一月九日にいたつて人民委員協議会は、革命によつてつくられた国家秩序を防衛することと

は人民委員協議会に移つたのであつた。

「労兵協議会執行協議会が政治の場から締めだされ、もはや権力もなく、なんらの重要性ももたなくなつた」(ローザ選集四、一〇〇頁)とローザはローテ・フアーネで述べるにいたつた。

この間、スバルタクスは、一月一日に指導部を選出し、活動にのりだした。「権力のすべてを、はたらく人民大衆の手に、労働者兵士評議会の手に！たえずすきをうかがつてはいる敵に対して革命の成果をまもれ！」(ローザ選集四、六〇頁・ローテ・フアーネ一月一日)だが、もちろん、ローザは、現実の革命の進行が、いまだ権力奪取にまでいたつていないことを冷静に見ていた。「労働者兵士政権は破産した帝国主義政権の代理人としての機能を果たしているにすぎない」そして「ドイツ革命のこの有様は、ドイツ国内の諸段階の進展の度合にそのまま見合つてはいるのである」(同 六二頁)だが、いつたん歩みはじめた革命は「一歩一歩、疾風怒濤をついて闘争と苦悩と窮迫と勝利のなかを目的に向つて進んでゆくであらう」(同 六三頁)

しかし、スバルタクスのかかる活動と主張にもかかわらず、その勢力は微々たるものであつた。就中、革命の中核となるべき基幹部分に影響力を拡大し得ず、むしろ労働意欲を喪失した労働者

や、激動の中で熱狂した小ブルを多くかかえこむ事になり、ローザが自身の手をしばる事にさへなつた。しかも、スバルタクスのかかる傾向は、斗争の中で左傾化し共通のレーテ独裁を主張していたオプロイテさえも獲得する事に失敗したのである。

オ二期

一月二六日、右翼によるレーテ執行協議会員逮捕未遂事件、更には、スバルタクス団のデモに対する近衛騎兵の衝突事件が起り、デモの側に数一〇名の犠牲者を出すという事件が起きた。これをきっかけに、SPD、USPD、スバルタクスの対立は一層深刻化するにいたつた。だがこの対立は、一月一六日からして予定されている全国労兵協議会をひかえて、いまだ軍事的衝突にまでは発展しなかつた。

この間の大衆の状況は、例えば、一六日を前にして開かれたベルリンUSPD大会で、国民会議を主張するハーゼ案がレーテ独裁を主張するローザ案を四八五・一九五の比で破つた事にも表現される通り、部分的な急進派はあつたにしろ、多くの大衆の急進派が進行したわけではなかつたし、まして、これが急進的なベルリンなのであつたから全国的には、いまだ革命への盛り上がりは蜂起へ移行するような段階ではなかつた。

スバルタクスは革命の骨抜き進行の中で一六日の全国労兵協議会に期待したが、事態がそのようであつてみれば、敗北は明らかであつた。はたせるかな、全国労兵協議会は、全代議員四八八名中SPD二八九、USPD九〇(うちスバルタクス一〇)という比率の中で、一九日三四四・九八という大差で、労兵協議会で

はなく普通選挙による憲法制定会議をもつてドイツの統治形態とする事を決定し、自から自身をほおむり去つたのである。この大会で中央協議会が設けられたがU S P Dは参加しなかつた。

このようにしてS P Dのヘデモニーのもとに對立に激化し、一月二四日の「血のクリスマス事件」は、より一方對立をおおひたてた。それは一月斗争の序曲をなしている。

ベルリンに在留していた人民海兵隊といわれる一隊は、一月二六日の事件以後、S P Dと對立するにいたり、S P DとU S P Dとの對立の深化の中でU S P Dへと傾斜していた。

そしてS P Dは、この部隊を解散すべく努力していたが、二四日給料の支払を政府が拒否した事から事態は深刻化し、人民海兵隊は、ヴェルヌラ軍司令部の幹部を監禁するにいたつた。エーベルトは、参謀本部に依頼し、前戦部隊によつてこれを弾圧せんとし、ここに戦争は開始されたが、海兵隊に不利であつた。しかし、この戦争を聞いてかけつけてスバルタクス指導下のデモが政府軍の背後にせまると、それは戦いを放棄し戦いは完全に逆転した。

この事件は、S P D参謀本部に深刻な波紋を投げずにはおかなかつた。けだし、彼等は、前戦部隊の使用によつて革命を粉砕しようと考えていたからであり、その才一戦に無惨な敗北を契したからである。そして、又この斗争は、革命を一層前へかりたると共に、同時に大衆の内部に深刻な分裂を引き起し、例えば、二四日のこの事件の犠牲者の葬儀にあつて二つの部分に分化するにいたつた。

エーベルトは、自己の地位の不安定さを思い知らされ、政府を

ベルリンから移動することさえ考え、かつ参謀本部に一層の依存を深めたのである。そして、この事はU S P Dを最終的にS P Dと決裂せしめ二九日人民委員協議会からU S P Dは引上げるにいたつた。しかし、U S P Dの右派はもとより、オプロイテに代表される左派もスバルタクスと統一する事はなく、ここに、スバルタクスは、プレーメン左派(ラディクラ)と共に、一月三〇日

ドイツ共産党を結成するにいたつた。事態は急を上げていた。しかし、ローザは、この共産党の創立大会に於いて革命の中間総括とも云うべき演説を行い事態の進展を正確にみつめていた。

「たち、一月九日から最近の日々に至るこの才一段階は、あらゆる面にあらわれた幻想によつて特徴づけられる」(選集四「綱領について」一四四頁) この幻想とは、要するに社会主義の旗のもとでの団結という幻想であつた。だが才二段階に入つたら、かかる幻想は破れ、それぞれの立場は明確化されつつある。それでは才二段階はどのような内容として展開されるのか。

「その時期(才一段階——八木説)には、革命が、まだ政治革命以外のなものでもなかつた。：。経済的な領域にある革命の主要な課題——経済的諸関係の変革には、まだ手が届かなかつた」(同 一四四頁)

「けつきよく、革命の才二段階では、ストライキが、しだいに拡大するだけではなく、革命の中心に革命を左右する地点に立つこととなつて、たんに政治的なだけの問題をわきへおしのけることになるだろう。そこで当然、経済斗争の局面はものすごく災難の度を加える」(同 一四九頁) このようにローザは、危機の深化

によつて才一段階の政治斗争から、才二段階の経済斗争に重点が移ることによつて、「いたるところで、労働者兵士評議會の手中に収める事によつて、ブルジョア国家を座辺から土台から掘りくずしてしまわねばならない」(同 一五七頁)と結論したのである。

⑤ ローザのかかる考えを「経済主義」としてその弱点として考える人々がいるが私は、遂に、この点をローザが現代革命の性格をきわめて明瞭につかんでいたものと考えている。この点については最後に検討する。

しかし、このようにして生まれた若いドイツ共産党は、その直後に、もう強いられた決戦に出会わねばならなかつた。しかも、その方針も、ローザの展望に於いてではなく、熱狂した下部におされてきわめて組織性のないままにであつた。一月斗争がそれである。

一月斗争は、先に述べた人民海兵隊事件とS P D、U S P Dの對立の激化の延長線上に、一月四日、ベルリン警視總監アイヒホルンを政府が罷免した事に端を発している。このころ、ベルリンには、人民海兵隊の他に共和国兵士隊といわれる警備隊が存在していたが、これも志気上がらなかつたと云われている。更に、前戦部隊も存在していたが、クリスマスの帰郷によつて市街戦に使用しうるのは千名足らずに減少していた。かかる中でU S P Dに属すアイヒホルンに率いられた保安隊は政府にとつて無気味な存在だつたのである。

このアイヒホルンの罷免は、すでに激化していたS P Dと革命派の對立を一挙に大衆の前に明らかにし、四日、オプロイテは、この報に接するや直ちに檄をとばして五日のデモを提起し、共産党も殆ど同じくデモを呼びかけたのである。

この段階で共産党は、先のローザの線で、いまだ政府打倒を目標にするのではなく防衛戦であるとの見解を持っていた。

だが、翌五日のデモは指導部の予想をこえて大規模なものとなつた。大衆は、警視庁の前に集まり、アイヒホルン、リープクネセトらは激しい政府弾劾の演説をした。だが、指導部は「協議に協議と」するのみで、明確な方針を大衆の前に提起しなかつた。のみならず、デモ終了後の会議(オプロイテ、共産党からリープクネヒト、ピーク)では、はじめ自らの行動に対する責任感が鉛のように重く会場を覆つていたが、会議の進行と共に裏返しの熱狂に変化し、前日の方針をくつがえして政府打倒を目標とすべきであるという結論を出すにいたつた。

六日のデモも大規模であつたが、同時にS P Dを支持する大衆も旧宰相官邸に集まり政府を擁護する態勢を示し、深刻な對立を示した。かかる中で、軍隊は、中立を宣言していたが政府の工作が進むにつれてベルリン守備隊はS P Dにかたむきはじめた。更に、熱狂し、没落しゆく小ブルを主体としたフライコール(義勇軍)をも政府は編成していた。

しかし、かかる、軍隊は、むしろ、労働者階級の斗争によつて初めて革命の側に加担するものとするれば、まさに問題は、労働者階級の指導部の行動にあつた。恐らく、指導部の確固とした方針

があつたならば、少なくとも一たんベルリンは革命の側に落ちたであろうと云われている。

すでにSPD右派は六日から調停にのりだしたが、政府側の断固とした制圧の意志のため不調であつた。更に、九日、A・B・C等の大工場の数千の労働者は会合し労働者同志の殺戮に終止符を立つたために調停に乗り出したが、これも失敗した。そのような中で、革命派は、明確な方針を出し得ないままに、事態におさまれて行動するのみであつた。ローザは、頭初、政府打倒に反対していたが一たん開始された以上、それはそれ自体の論理で進む事を見取つて徹底的な斗争を行う事は「革命の名譽」のために必要であると考えていた。彼女は指導部の無能に対し、「行動を！行動を！勇敢に、断固として、徹底的に行動すること——これこそ革命的オプロイテ、ならばに誠実な社会主義指導者たちの絶対の義務であり、責任である。反革命を武装解除し、大衆を武装して、権力の陣地のすべてを占領せねばならない。迅速に行動を！」(選集四、一六四頁、ローテ・フアーネ一月七日)

九日、ゼネスト宣言に従つて再び大デモが催されたが、すでに労働者の中に流血の中止を呼び、政府と同時に革命派に対しても非難の声が上つていた。このような大工場に於ける労働者階級を革命の側に獲得できなかった事、これは指導部の逡巡の結果であると共に、それにいたる過程の問題でもあつた。

政府は、この中でフライコールでもつて、弾圧し、ついに一三日、オプロイテは、労働者にゼネストの中止と就労をうながすにいたつた。指導部の方向のなさは、あます所なく暴露された。

(5) 現代革命の条件

以上のように、現代革命は、その悲劇的な幕を開けることになつた。我々は、このドイツ革命の敗退の過程から、その問題を理論的に検討しなければならない。

まず、この一月斗争の過程は、その指導部の若さを強く印象づけた。そして、それは、ローザの組織論の弱点と関連させて語られている。(注)

(注) その点については、ルカーチ「組織論」に、ほぼ完全に展開されている。

レーニンも、「ドイツ労働者は、あまりにおそく行われた分離のために、墮落した(シャリデマン、レーギン、ダウイド等々)、無性格な(カウツキー、ヒルファディング)資本の従僕との統一と一々というにくむべき伝統のために危機の暖かいお真に革命的な党をもたなかつた」(「ドイツ共産党員への手紙」全集三二)と述べている。

しかし、もちろん、レーニンの提起は、分離が行われていれればいいといった単純な問題ではない。何故なら分離の行われていたヒットラーとの斗争で、ドイツ共産党は再び完全な敗北——それは、もはや党の若さのせいではない——を経験するのだから。

いつたんオプロイターによつて分離された共産党は、三、四回大会で、統一戦線を打ち出してしたが、ヒットラーに対する敗北は、この正しい適用を過まり社会ファシズム論のせいであるといわれている。確かに、それはその通りであろうが、その時又、一

しかし、それは、この段階での技術的手段ではいかんともしたがたものであつた。まさに「あまりにもおそすぎた分離」の結果であつた。ローザは、その組織論の弱点を気づかないわけにはゆかなかつた。「大衆の革命的エネルギーを集集することとして大衆の斗争を指導するにふさわしい機関を作りだすこと——これが、つぎの時期の焦眉の課題である。」(同 一七四頁、ローテ・フアーネ一月一日)と彼女は初めて指導部の重要性を痛感して書いたのである。

彼女は、この斗争の総括を行い、次の展望——経済斗争の激化と大衆の革命化——を明らかにしつつあった。「ベルリンの秩序は維持されている！」ほざくがよい、鈍感な権力の手先どもよ！おまえたちの『秩序』は砂の上の楼閣だ。あすにも革命は『物の具の音をとどろかせてふたたび立ちあがり』、トランベットを吹きならして、おまえたちの驚愕をしりぬに、こう告げるだろう
Ich war, ich bin, ich werde sein!

(われは、かつてあり、いまも在り、こんごも在る！)

(同、一八七頁、ローテ・フアーネ一月四日)だが、彼女は、スバルタクスを強固にきたえなおすだけの時間を持つ事はできなかった。

この翌日、ローザとリーブリネヒトは、フライコールの手で殺され、ドイツ革命の遺産と行を共にしたのである。

月斗争と同じように圧倒的な基幹部分の労働者が、SPDのもとに中立を持して動かなくなつた点を考えるならば危機に於ける統一組織戦術の正しい駆使のみならず、それにいたるまでに、この部分をとどろかして獲得するかどうかという点に問題は存在していると思われる。我々は、そのような部分を獲得しうる機能を保持するためにこそおそすぎた分離を云々しなければならぬのであろう。

さて、(3)で述べておいた。革命思想II組織の発展の中で、現代革命の問題は、どのように展開されねばならないのであろうか、主としてローザにそくして検討してみよう。

一月斗争に於ける敗北は、結局、レーテに大衆のエネルギーを吸収する事によつて資本主義を「底辺から」ゆすぶり倒そうとする当初の方針が事態の進行によつて放棄され時機尚早に街頭へ出て決戦へ進んだ点であつた。

しかし、かかる街頭行動も、恐らくブルジョア革命又は永久革命の段階(一八四八年まで)では、唯一の斗争形態だつたのである。その段階では、革命的情勢の中で、斗争を徹底化し、パリケードをききすぎ、その事によつて政治権力を粉砕すればよかつたのだ。確かにブルジョア革命と永久革命とは後者はプロレタリアートが斗争のヘゲモニーを握っている点で異なっているが、その斗争の形態は、変化してはいないのである。これは、パリケード革命とも名づけられるものである。(注)

(注) グラムシのいう機軸戦とは、このことをさしていると思われ「新君主論」

しかし、歴史の弁証法は、かかるバリケード型革命へ打つて出たスパルタクスのもの見事にしりどけてしまった。

だが、もちろん、このようなバリケード戦が現代革命に不要なものになつた等と考えるのは、バカなオシャベリであろう。ロシア革命に於いても結局は蜂起こそが事態に決着をつけたし、ドイツ革命に於いても、一たんレーテに吸収されたエネルギーは、再び、蜂起の問題を必然的に提起する段階へ深化したのである。問題は、どのような準備と過程を通つて、機動戦に移るかという点にある。(註)

(註) 構革の諸君に一言しておかねばならないが、グラムシは、決してその陣地戦によつて平和革命や議会の多数獲得を云々したわけではない。例えば、彼が、力関係の才三のモメントとして軍事的 政治的、又は政治的 軍事的モメントに言及している点からも明白である。

又、人民戦線との関連では、それを一種のボナパルチズム「それは特定の情勢、すなわち二つの勢力がたたかいつていて、どちらも、独自の分野で独自の再建の意表を表明する能力をもつていないような情勢に結びついている」(選集一、一七一頁)と見ていたらしいが、ここで検討は出来ない。

ドイツ革命の敗北は、まさに、労働者の多数を獲得する以前に決戦に出た事によつており、しかもこの多数獲得は、確かに革命的情勢の中で革命的戦術を通じて最もよくなし得るのであるが、スパルタクスにとつては革命情勢の訪ずれる前に、ある一定の大

衆を基幹産業に於いて確固として組織できなかった点が、いかにハンデイとなつたかは、すでに見た通りである。

この点は、例えば、ロシア革命に較べてみればきわめて明らかである。ロシアに於いては、主要都市のプロレタリアートの中にポリシエウイキは確固とした組織を有していた。だが、どのような工場の中で影響力を拡大するかという点では両者は異なる条件にあつた。ロシアに於ける経済斗争は、絶対主義の存在の故に、ただちに政治斗争へと転化し、しかも、そのような斗争は不可避的に蜂起へ発展するという法則性を有していた。(註)

(註) この点については、レーニン全集一八巻「経済ストライキと政治ストライキ」、革命的昂揚等、反革命から運動が回復する過程でのレーニンの諸論文を参照されたい。「頑強な大衆ストライキは、わが国では武装蜂起と不可分に結びついている」(レーニン全集一八「革命的昂揚」一〇三頁)

従つて、ここでは、絶対主義に対する敵対意識、それが宣言、扇動の内容であつた。政治的自由を獲得することも、経済的改良を勝取る事も異常なまでに困難であつたそこで一切は、ツァーリの打倒が問題であつた。(註)

(註) 「ロシアの生活におけるこの全般的な無権利状態、個々の権利の獲得のための闘争を行う希望も可能性もないこと、ツァーリの君主制とその全体制が改善しがたいものであること、これらのことがレナ事件からあきらかになつたからこそ、大衆は革命の炎を燃えあがらせたのである」(レーニン全集一八、一一〇頁「革命的昂揚」)

それに対して、ドイツに於いては、カイゼルトウムの存在があつたとはいへ、まがりなりにも政治的自由は獲得されていたし、経済斗争は、労働組合の指導のもとに容認され、ロシアのようにストリートに政治斗争へ発展する事もまして蜂起への傾向もあつたとはいえない。従つて、ここでは、労働者階級を改良斗争を通じて教育する有利な条件が形成されていたが、同時に、この容認された政治的自由はブルジョア民主主義と経済斗争が体制内に封じこめられる事によつて、容易にブルジョアジーと、その政治権力に対する敵対的意識は形成されなかつた。しかも、かかる事態は、何にもまして、労働組合の職業化、官僚化、その比重の増大による社会民主党の変質をもたらす事となり、労働者階級は、いわば二重の鎖に呻吟せねばならなかつた。しかも、かかる労働組合は団結の進行した基幹部分の労働者階級こそが中心となり、彼等の階級意識の荒廃をまねいていたのである。かかる平時に於ける労働者階級の状況は、革命的情勢の到来にもかかわらず、トロツキー云うところの「上部構造の慣性」によつて客観情勢においつく事ができず、その内的な危機をもたらずのであつた。それ故、問題は、まさに平時に於ける改良斗争を通じて、労働者階級をどのように組織化するにかかっていたのである。この問題を我々は検討しなければならぬが、そのためには、何故、かかる労働者階級の分裂、体制内化が行われたかを見ておかねばならない。

その問題は、レーニンの規定に従つて、帝国主義段階に於ける超過利潤による労働者の買収、労働貴族の発生として理解されて

いる。確かに、それは正しいのであろうが、問題は、そのみにとどまらず、まさに産業資本主義段階から独占資本が成立するにいたつた直接的生産過程の変化という点を見落すならば、それはまったく不十分であらう。この事は、高度資本主義共通の現象であるが、ここでは、後に述べるシヨブ・スチュアート運動を関連させるためにイギリスに於いて、コンピネーションを中心とする生産過程の変化が、どのように労働運動に作用したかを見ておこう。

イギリスに於ける労働組合運動は、オーエンの思想に影響され、大連合の崩壊の後、いわゆる新型組合が確立される。これは、不熟練労働者を排除した熟練者によるものであり、それは、一八五〇年と七〇年の間、世界の工場としてのイギリスに於ける産業資本主義段階の最終段階に見合うものであつた。

だが、かかる組合は、独占資本の成立、それは、まさにコンピネーションを中心とする生産過程の変化を軸としている。よつて危機におちいつた。従来、熟練工は不要となり、ここに、労働組合は、不熟練労働者に対しても門戸開放し、産業別労働組合が成立しはじめた。ところで、従来の新型組合は、その組織の中核を工場におくのではなく地域におき、高額の組合費による相互扶助的の意味ではクラブ的なものであつたが、独占の成立と共に発生した産業別組合は、一方で団体交渉権を中央集権化するのみならず他の労働諸条件を防衛するための工場に於ける活動が要請されていた。しかし、この事は、きわめて困難をきわめた、とい

うのは、生産過程の高度化によつて、労働者はますます、思うままに資本の側につながれ、それを現実的に保証する新しい労務管理体制がしかれたからであり、しかも、レーニンの周知の規定のように独占利潤による上層労働者の買収が行われ、更に又、かかる生産過程の変化に共なる都市中間層の発生とブスロークラスの強化。といった、大衆社会論者のようが如き事情が生じたからであつた。

このようにして、生産過程の変化は、労働運動にも根本的な変化を与えたのであつた。資本の職場に於ける支配は、労働組合によつて、いわば補完される事によつて完成した。しかも、かかる段階で、経済的改良斗争を抜きにして一般的な政治的な活動は事實上不可能であるか、ないしは、単に街頭化するのみで、国家の根幹をなす工場に於ける資本の支配は貫徹するという結果を招いた。かといつて、即成の労働組合と妥協するならば、ドイツSPDがあゆんだように完全なブルジョアの代理人となる以外はなかつたのである。

これらの事実は、革命的情勢に、明らかに表現される。先に述べたように、ドイツに於ける革命の才一段階は、カイゼルトウームの打倒 政治的自由の獲得を以つて開始された。これはロシアに於いても又同様であつた。しかし、ドイツに於いて、それ以降（十一月九日以降）大衆の右傾化がすでに現われた。しかもドイツブルジョアジーは、いわば国家権力なしにやつてゆけるという事情が生じたのだ。即ち、いわゆる労働共同体を創出する事によつて、権力の強制を借りる事なく、労働者の同意を勝ち取り工

シカリズム——これらは偶然ではなく、独占資本主義段階で生じた、日和見主義のもう一つの形態である。

このようにして、個別資本との敵対は、国家権力を改良すれば解決するが如き幻想が生じたのである。このような幻想を打破するためには、工場に於ける権力の拡大（経済斗争）を徹底化させ、その事によつて国家権力との衝突へと発展し、個別資本との国家権力との同一性が認識されねばならない。だからこそ前に先走つて述べておいたように、ローザが、革命の才二段階はストライキによる経済斗争であるとしたのは、経済主義などではなく、現代革命の法則としてまつたく正しいのである。

更にこのように、ブルジョアジーが、国家権力の動揺にもかかわらず、市民社会に於いて再生産を行いうるという事情が生じたからこそ、まさに、現代革命は、工場に於ける労働者の組織、レーテを基底にしてしか達成し得ないのである。かかる形態に於ける現代革命が、日程にのぼつた事は、すでにオーストリア革命によつて明白であつた。

ローザは、それ故、永久革命型とも、オニインター型とも異なつた、大衆ストライキこそが、中軸となる革命について論じたのであつた。ローザは、「ところで、ロシア革命が以上の論拠（マルクス・エンゲルスによつて云われたプロレタリアートがすでに十分に強力な組織をもつてゐるならば、もはやゼネストなど必要としない」という考え——八木沢）に根本的な修正を加えるにいたつた。ロシア革命は、階級斗争の歴史のなかで、はじめて大衆ストライキの観念や、さらにゼネストの観念を現実にはなばな

場の秩序を保ち得たのである。彼等は、いわば、国家権力とは無関係である。それが、どのようになろうと自分達には関係ない。我々は、ただ、工場の秩序さえあればよい」と言明し得たのである。このようにして、彼等は、労働者階級内部の分裂を利用し、その上層部分と同盟する事によつて、その上層部分を国家権力に送りこむ事によつて事態を収集し得た。この事を逆に労働者階級の側から見るならば、彼等は、国家権力を支えているのが、とりもなおさず、自分達の工場の秩序を中軸とする市民社会に於ける活動であることを理解し得なかつた事を意味している。しかし、

そんなつた理由も、ドイツのひいては高度資本主義国家内部にあるのだ。つまり、先に述べたように、ロシアに於いては、経済斗争（個別資本に対する斗争）も、必然的に、国家権力の介入をまねき「蜂起と結合」（レーニン）していた。それ故、ここでは、個別資本への敵対意識は、国家権力への敵対意識と不可分であつたのに対し、ドイツに於いては、経済的改良斗争は、容易に国家権力との衝突へ深化せず、個別資本内部で解決され、ただ、経済的改良を獲得するために国家に立法を要求する（いわゆる組合意識に接ぎ木された限りでの政治）ためにSPDの議会に於ける得票をふやすにすぎないという結果をもたらした。

かかる、上層労働者に対する反発として、いわば、その分身としてサンジカリズムが現われる。ドイツに於いては青年派、フランスに於いては、フレブルに思想的代弁者をみいだすそれ、イタリアに於いても一九一〇年代のサンジカリズム、日本に於いても民本主義に対立する、大杉のアナルコ・サン

しく実らせ、労働運動の発展に新紀元をひらいた」（ローザ選集二、一七四頁）「大衆ストライキ、党および労働組合」と述べる時、この事は明らかである。

だが、このようにして現代革命が日程にのぼつた事、それが、大衆ストライキを軸として発展するという事を確認する時、しかも、ローザが「党は、大衆ストライキの技術的準備をするのではなく政治的指導を行わねばならない」と云う時、それは、相互に関連する二つの点が不明確である事を逆に明らかにする。オーストリアの周知のように、党組織論の欠如という事である。オーストリアは、かかる大衆ストライキが、どのように権力奪取と関連しているかという点である。

⑤ この点は、すでに多くの人によつて云いつくされているので、検討を省略する。ルカーチ「組織論」参照。

オーストリアの点で、ローザは「大衆ストライキは、政治斗争に対立するものではなく、政治斗争におけるひとつの武器として運用されるべきものであり、また一挙に社会主義体制への移行をなしとげる奇跡的手段ではなく、現代の階級国家において、最も基本的ないくつかの自由を獲得するための、階級斗争の一手段として運用されねばならない」（選集四、六三頁）と述べているが、これは正しいとしても、それ以降の発展の形態としてのソヴィエトと武装蜂起についてはふれていない。事実、彼女は、一九一八年に書いた「ロシア革命論」においてさえ、ソヴィエトと憲法制定議會を調和させようとし、後者を解約したボリシエヴィキを批判している（選集四「ロシア革命論」二四八―二五二頁）。レーテ独裁を

結論するのはドイツ革命における実践の帰結としてであった。

更に又、このような、党、レーテに対するあいまいな見解は、革命的情勢にいたる過程で、いかに大衆ストライキ↓ソヴイェト蜂起を準備するかという点の、周知の自然発生性理論による、欠如とも関連している。一月斗争の過程で悲劇的な形で現われるのである。

レーニンが云つた「おそすぎた分離」と共に、そのように分離した組織が大衆ストライキとレーテを準備するために、一方に於いて、政治的な宣伝、扇動活動と共に、組織的には、工場に於ける権利の拡大による労働者への影響力が必要であつた。この点でも確かに「改良は革命の産物」であるといわれるのも事実であるとしても、特に高度資本主義国に於いては、改良斗争が容易には権力との衝突をもたらさない以上、この改良斗争を、どのように位置づけるかは、きわめて重要であるといわねばならない。ローザは、すでに修正主義との論争に於いて「社会改良のための斗争は社会民主党の手段であり社会革命はその目的であるから、社会民主党にとつて社会改良と社会革命は不可分の関係にあるのだ。」(選集一、「社会改良か革命か」一五四頁)と述べているが、改良斗争は、どのような形で工場に於ける権利の拡大をもたらすのであるのか。かかる、工場に於ける影響力なしには、それは、スパルタクスのように、いたずらに街頭斗争にエネルギーを放出させるのみで、レーテに大衆のエネルギーを吸収し、「ブルジョア社会の底辺」から掘りくずす事はできないのである。

しかも、このような工場に於ける権利の拡大が、いかに独占資本

主義段階で困難になつたかは先に見た通りである。しかし、我々は、かかる困難な中で、工場に於ける権利拡大からゼネストへと発展していつた例を、イギリスに於ける、シヨップスチュアートII少数派運動による一九二六年の革命情勢に見て取る事ができる。

先に述べたように、イギリスの組合は、産業資本主義の段階で、まず地域に結成されたが、独占資本の成立と共に、単なる賃金問題だけではなく、職場に於ける種々の労働条件が問題とされ、従来の地域的クラブ的組織では機能を果たせなくなつた。そこで、労働者は、職場に於いて、代表(シヨップスチュアート)を選出し、かかる職場の要求を汲み上げる機能を与えたのである。このようにして発生したスチュアートと組合との関係は、ある時は、組合を強化するための補完的機能をはたすと共に、組合が、官僚化し中央集権的な質上げ交渉にのみ専心するといつた時には、これと敵対しなければならなかつた。

このようなシヨップスチュアートの運動は特に、大戦後「少数派運動」として展開され合理化攻勢の中で地歩を固め、ついに二六年のあのゼネストへと発展していつたのである。これは一種の戦斗的才二組合とも云うべき、官僚化した組合に敵対し、工場に密着した活動家組織によつて指導されたのであつた。

このように、現代革命は、永久革命論の提起した、ダイナミツクな戦術による運動の急進化IIシヤコパン主義、才二インターの提起したプロレタリアートの独自性II組織戦、の統合として、分離された党による政治的な宣伝、扇動と共に「改良斗争」による

工場での権利拡大、革命情勢に於ける、大衆ストライキから、レーテへと必然的に発展するのである。一方に於ける、改良のつみ上げでは、革命へは決していたらないし、他方、改良斗争を通じて工場に於ける権利の拡大を抜きにしては、単なる、官僚団体となるか(ヒットラー登場時でのドイツ共産党)又は街頭化して権力に粉砕されるか(スパルタクス)のいづれかである。

一九一八年一月九日から一九一九年一月一日にいたるドイツ革命の流産は、現代革命の典型的な姿を示した。々々にくむべき統一の伝統(レーニン)は、労働者の真の統一へ転化しなかつた。

ローザ・ルクセンブルグは、現代革命が日程にのぼつた事を理解したが、にくむべき統一を破ることをしなかつた。それを破つた時、スパルタクスは、彼女の意に反して、いわば永久革命型に逆もどりする事によつて権力に粉砕され、ドイツ革命の流産と共に、彼女の死体は、ランドウエア運河に流されたのである。



春闘をめぐる情勢

労働問題研究会

今年も三月二・三日公労協を中心とする春闘総決起集会を皮切りに、「春闘」がハチマキとタスキの中に入った。

今春闘を特徴づけるものとして、まずあげられるのは「大巾賃上げ」への激しい要求である。慢性化した過剰生産傾向と強蓄の結果露呈された構造的矛盾は消費物価の止む所を知らぬ値上りを続けさせている。実感としての「家計」の苦しさ、労働者の不満を「大巾値上げ」に結集させる充分な基盤となっている。

総評傘下の各組合は公労協・民間単産とも「ヨーロッパなみの賃金：二五%以上の賃上げを」と五、〇〇〇円↓八、〇〇〇円の要求をかがけている。また、同盟会議すらも春闘と時期を同じくして、四、〇〇〇円↓八、〇〇〇円の賃闘を打ち出している。

この「大巾賃上げ」の「激しい要求」こそ、今、春闘のおかれた位置を物語るものである。

今春闘をめぐる客観情勢は、確かに資本にとって樂觀を許さぬものとなっている。特に開放経済体制への移行という点に焦点がしぼられるが、同時にそれが経敵成長の鈍化、輸出力の増大および輸出をめぐって日本の低賃金構造そのものが問題となることから、一層問題は深刻になっている。特に、国家独占資本主義の信

る。そのため、新技術をもつ生産性の高い新機械・新工場をストライキ戦術の中心にすえ、これらの青年労働者を春闘の中核にする。具体的に重化学工業部門であるとし、さらに二月の臨時総評大会では「今春闘は従来のスケジュール闘争の欠陥を克服するため三月下旬から四月下旬にかけて、弾力的な高原闘争を闘う」としている。すなわち、ウラを返せば統一的な指導を放棄する、と言っているのだ。すなわち具体的な組織方針としては「青年労働者はハッスルせよ」としか言われていない。

ここ数年來の春闘は「一年前の人事院勧告」↓「公労協への仲裁裁定」↓「民間は中労委がそれをうけて調停」というコースから、一歩もふみ出していない。民間の指導は、一定の大衆的昂揚ののっかり、国家的第三者機関による独占のコントロールをスムーズに運ぶことに手をかすことにつぎるのである。五五年五単産共闘が、産別統一闘争方式⇨春闘方式に発展した当時においては、五六年経済白書が「もはや戦後ではない」と表現した日本資本主義の高度成長そのものが「春闘方式」による一定の賃上獲得を許容したのであった。それは、高野方式にみられた左翼労働組合主義に対して、資本が「近代的（自立的）労働組合運動」を要求した過程でもあった。そして、資本の要求は、ほぼ容れられたのである。人事院勧告、第三者機関の全面的活用により国家独占の春闘への影響力は、ほぼ貫徹したかにみえる。労働者階級は、春闘のたびに、より後退し、春闘は経営者のための搾取強化の場とすらなりつつある。そこにわれわれは、資本の攻勢の質的変化を（あるいは、資本の労働組合への要求の変化）見ることができるといえる。それはいうまでもなく高度成長政策から安定成長への転機を

用膨張政策の結果、ここ数年企業収益率の低下が現実化して来ており、賃金抑制に一層の「情熱」をもえたたせさせている。一月日経連の賃金白書は、「賃上げは五%以内にとどめよ。開放経済下、企業のもとに労働者も結束する必要がある」と、今春闘への、方針をあきらかにした。しかし、いかに自由化のもとでの「企業の利益」が強調されようと、わずかな実費賃金の上昇が数字をひきあいに語られようと、現実からの労働者の生活の全面的圧迫は、「大巾賃上げ」の要求を、抑えがたいものとしているのである。

しかし、今春闘の問題は、そこにはない。このような経済の傾向は、二、三年來指摘され続けて来たところである。そして事実、春闘のスローガンも数年來「大巾賃上げ」であった。そして、それが毎年「小巾妥結」に終って来たのである。すなわち、賃上げの大衆的な憤激が存在しながら、それが資本に迫る運動としては、組織されていないこと、そしてそれに対して民間自身がもはや無方針であること、が問題なのだ。ここでは当然、春闘の指導が問題にされなければならない。

総評・中立系春闘共闘委の春闘方針を見よう。すなわち「若年労働力市場では売手市場に変化しており、大巾賃上げの条件があ

契機としている。結論的には、それは「合理化」につぎる。そして資本の労務管理政策は、五六年「赤色労働組合主や批判」としてあらわれた民間に、全労的・第二インター的運動を必然的に要求するにいたる。

しかし、職場における日々の資本の圧迫の強化、合理化・首切り不安、数年來の賃上抑制は、労働者の不満を増大させずにおかない。若年労働力の不足は、大企業労働者までもふくめて労働力の流動化をまねている。そして、それは大巾賃上げの要求につながる。

この中において、民間指導はその方向を全く喪失するに至るのである。民間指導部は、昨年末から大巾賃上げを吹きあげ、「若者よ、ハッスルせよ」と反幹部闘争をすら煽っている。春闘が、先述したルーティンの上で毎年「小巾妥結」にとどまり、「春闘」そのものが形骸としてしか存在しえなくなった。と同時に、そこまで追いつめられた労働者階級の中に、ウツ積された不満は、民間の労働貴族としての地位をゆさぶりはじめたのである。しかし一方、民間指導は、その特色を、一定の大衆的身場があってはじめて（それを、資本に対決させるのではなく企業別組合を通じた官僚体制によって、上へ上へと吸収することによって）発揮できると。その民間の立場が、一方で戦闘的発言を発し、一方では今年もまた、公労協九組合がいち早く2月中旬に、公労委に調停を申請させている。今年の春闘は、こうみて来る限り、その底部で労働者の不満を渦巻かせながら、追いつめられた労働者階級の、そしてまた追いつめられた民間指導部の、危機をいっそう露呈するものだといえる。

また、民同指導による運動の空洞化（職場闘争の放棄によって、闘いのヘゲモニーを収約することによって官僚的に支配し、その結果職場において日々資本の攻勢に敗退してゆく）は、その反面、労働組合における官僚的支配をいっそうきびしくしている。「しめつけ」である。口では、「職場闘争」をいういわゆる「協会派」も、職場闘争の徹底化にあって闘争のヘゲモニーを下へ下してゆくのではなく、民同指導のワク内で（職場闘争の徹底化は当然、官僚的組合支配と衝突するが）闘争指令の請負いに終始する限り、客観的には民同による「しめつけ」のための先兵化には民同による「しめつけ」のための先兵化しているのである。

これに対して日共は、今春闘では、春闘そのものをほぼポイントとしている。3/2 集会对置して、ビキニ・デーに最大の力量をさき、それ以後は日中国交回復と農村における活動の強化（2）である。いちじるしく反共的性格をつよめた民同支配下の労働運動とは、全く無縁なところで党派運動を組織している。

これでは問題は一步も解決しないのはあきらかである。労働過程が日日資本の手に、掌握され、そこにおいて労働者が日々後退が余儀なくされているにもかかわらず、労働者が労働者として（労働過程において）資本と対決してゆく中で階級意識の深化をはかるのではなくて、自己の党派のまわりに集った労働者を街頭にひっぱり出し、「反アメ帝」といった超階級的な宣伝を行うことによつては、運動の力化はあつても、（党派運動はあつても）労働者階級のもつ現在の問題点にいささかも関わることをしない。そこで、昨年の原水協に続いて、東京地評・京都地評といった地域における共闘組織すらもが、（右傾化した社会党のセクト性

が問題だが）分裂するに及んで、日共は、社会党、総評を（そしてその影響下にある労働者）を、ますます反共の淵に追いやる役割を果たすのだ。

さて、このように見て来たとき、今春闘はたしかに民同指導部の思惑を越えたところで、昇揚が起ることは、予測できる。すでに公労協の中の国労が「交還共闘」に参加し、公労協とは幾分独自のなスケジュールを組んだことにもあらわれている。また、勤労労働者への反合理化への闘いは、部分的な激発すら予測できる。そして、金融引きしめの影響をま正面からかぶらねばならぬ中小企業労働者の闘いがシ烈化している。

しかし依然として、そのような自然発生的昇揚のまえには、今まで来て来た社・共の党派運動が立ちふさがっている。追いつめられた資本の手でも、既成指導の手がらも労働者階級がギリギリのところまで立ち上る、これらの闘争に、われわれは結合する必要があるだろう。そして、その中で原則的な政治的方向を明らかにしてゆかねばならない。



評書

|| ドイツチャー「武装せる予言者・トロツキー」 ||
マルクス主義における革命と
ジャコバン主義

ソヴェト立憲主義とブルジョア民主主義
の分岐点

まつむら・さぶらう

これまで共産主義運動における反スタトロツキズムとは、ロシア革命史のなからトロツキー主義を抽出し、抽出したスターリン主義の悪をその対極におくという方法を運動の原則そのものにかえようとしたもので、かつこのパロ派にせよキャンオン派にせよ、あるいはさまざまのその亜流にいたる党派にせよ、その思考と運動の原則は一貫してこの方法に貫かれている。そして今日では、現代革命の原則としてこれらの方法が運動に耐ええない、ひとつの観念として存在していることを明らかにしている。それはトロツキズムの破産乃至はスターリニズムの消滅そのものによるのではなくて、この抽出方法の原則化そのものの原理的破産によるものである。たしかに革命の墓泥棒スターリンによって隠滅されたロシア革命とその時代を国家と歴史的矛盾の集積の全体として理解しつくすことは重要である。しかしそれにとどまるのではなくて、その理解とはマルクス主義におけるプロレタリア革命の原則としてなにを附与しうるか、その現在化そのものを明らかにするものでなければならぬ。いわゆるソ連論への第一の視点とはその内容を意味する。

さてこうした点を明らかにするためのドイツチャーの指摘は、

これまで明らかでなかつた多くのものを含んでいる。ジャコバンとマルクス主義、永久革命に関してのバヴルスの理論、十月革命とインターナショナルイズム、有名な代行主義の帰結等、その全体にわたつてのべる余裕はないが、これらの全体を通じてドイツチャーが主張し、かつわれわれが評価しなければならぬのは、トロツキーの個人の思想とその悲劇的運命のあれこれのせんさくでなくしてロシアマルクス主義の形成と党の理論、ソヴェトと国家の理論である。

デカブリスト、ナロードニキの時代を通じてボルシエヴィキがその党の歴史的生得権たる代行主義において、否定的理念としてたつたジャコバンの理念と、それにかわるべきソヴェト立憲主義 || プロレタリア独裁の成立と停滞の過程は、農業後ロシアの資本主義化におけるインテリ運動を強力な要因として成立したものである。それはヨーロッパ的思想としてのマルクス主義を単なるブルジョア民主主義 || ジャコバンニズムの枠にとどめ、政治技術として革命とその政治過程を考へるのでなく、プロレタリア独裁の概念と、プロレタリア独裁の表現としてのソヴェト立憲主義のまずまず拡大する矛盾の止揚を間接的目標としたものである。その目

標の実現のため必要とされたのは、レーニンのロシアの現実に対するふかい証であり、トロツキーのヨーロッパ思想への証であらねばならなかっただろう。だが、ボルシェヴィキの誰よりもヨーロッパ思想にふかく、亡命期間のヨーロッパ滞在においてドイツ社民の急進派よりは中心的グループとの交渉のふかかったトロツキーの外交は結局敗れた。歴史と革命中の過程からみれば、それはロシア的なソヴェト立憲主義の停滞過程の起点を意味した。いや意味したのは、事象の外在的な、継起的な起点でなしに、内在的なマルクス主義のロシア化における理論と思想の停滞起点でなければならぬ。労働者反対派、セバステリアン派の運動を抑圧したトロツキーが、逆に今度は反スターリニストとして逆にその運動をにかけてあらわれようとしたとき、彼のとらねばならなかった武器は、ヨーロッパジャパニズムの教典でなくて、今度こそロシアマルクス主義の教典でなければならぬ。だがレーニンというヨーロッパとロシアの接点をうしなつたソヴェトは、スターリンによるロシア化の徹底化し官僚制度と恐怖政治へ、トロツキーによる時節おくれのジャコパン主義へと、歴史の反動過程をたどる。

その過程は、マルクス主義が徹底してそれまでのブルジョア民主主義の原則と異なる一点をかくしつづけ、まだ歴史そのものが発見しえない原則を口ごもって語るうとしていくかのような印象を与える。しかしわれわれは不可知論を主張しようとするのではない。その原則とは、あれほどヨーロッパ化され、ヨーロッパの運動に詳しいトロツキーにおいて彼の歴史的ロジックと心理の法則に(P二六七)反して起つた事態への即自的な対応を意味する

のではない。まさにそこにブルジョア民主主義とプロレタリアソヴェトとの間に引かるべき境界線が存在しうるのである。歴史はどのような誤謬と試行錯誤にたいしてもその修正を許さず、その誤謬の貫徹を要求することがある。革命がロシアの丸太小屋に窒息させられるのでなく、ヨーロッパがアジアへの展望をもたねばならなかった時点から現在まで、歴史はついにたにも遂行しなかつたように、ジャコパン的市民主義の止揚は、なおわれわれにも課せられた任務である。(六四・三・一五)

編集後記

△我々は前号で、学生運動の新しい波、戦後の第三の転期を向えつつあることを指摘した。

その転換は、国内、外の情勢に、そして、労働運動の内部にも表われている。

その転換の内容と方向を明らかにすることが、我々だけではなく日本の反体制運動にとって早急の課題となっている。

残念ではあるが、我々はこの号で、その実体を十分に明らかにしえたと云えない。

しかし、この実体を追求し解明する為の我々の視点はまちがっていないと思うし、読者にも十分解ってもらえたとと思う。

△いよいよ新学期が始まる。我々の前に新しい部隊が登場する。四月から、日韓会談阻止の全日政治斗争を展開しなければならぬ

い。来るべき斗争の為に新しい世代をまき込みながら、闘争を通じて、学生運動の全日化を勝ちとろう。

△戦士五号は、故に日韓会談を中心に情勢分析を行い、その意図するものは何か、その実体を解明すると共に、その阻止の方向、如何なる斗いを展開すべきか、又できるのかを明らかにするであろう。

△現代革命論は、前号の「イタリア革命」に次いで、この号では、「ドイツ革命」をとりあげ、現代革命の法則性を追求した。

次は、現代革命論③として、「フランス人民戦線」を中心にとりあげる。

○本誌の購読を希望されるかたは、下記の予約誌代をそえて申込んで下さい。

半年分前金(送料共)	500円
(3部)	
1部	150円
送料	30円

○送金は振替貯金を利用して下さい。

1964年3月31日発行

戦士 4号

編集発行

社会主義学生同盟関西地方委員会

振替 京都 3502番

連絡先

京都市左京区北白川西平井町14

竜平荘内

竹内陽一

